

鈍
獣

DON-JU

**KUDO
KANKURO**

宮
藤
官
九
郎

登場人物

(これは作者が戯曲執筆前に俳優陣に手渡した資料です)

凸川(池田成志)…小説家？

江田、岡本の幼なじみで、東京で小説を書いているらしい。
子供の頃から、なんとも言えない独特の存在。
現在は行方不明。

江田(古田新太)…ホストクラブ「スーパーヘビー」店長
地元でホストクラブの他に多数の飲食店を経営している。
基本的に悪人だがツメが甘い。
「オレは若いころ、人ひとり殺してるんだよ」が口癖。

岡本(生瀬勝久)…「スーパーヘビー」の常連客
江田の店の常連で、いつも暇そうな男。
子供の頃からの上下関係に縛られ、江田には逆らえない。
主体性はないが、時々、まともな事を言う。

静(西田尚美)…女性編集者
雑誌「週刊太陽」の元凸川の担当編集者。
凸川の行方不明に疑問を抱き取材をしている。
思い込みが激しい。

順子(野波麻帆)…江田の愛人
江田が経営するスナック「順子」のママ。
典型的なヤンキー気質で、真っ直ぐな性格。
江田とは長い愛人関係

ノラ(乙葉)…ホステス
元々は「スーパーヘビー」の客だったが、
いつのまにか江田の店で働くホステスに。
順子は高校時代の先輩だが、仲は良くない。

第一幕

◎ 駅前のタクシー乗り場

メガネをかけた女性記者の静が携帯電話で話している

静

「もしもし元週刊太陽編集部です、いえ、静岡じゃなくて静です。
はい、まだ駅です、タクシーが来なくて…ごゆっくりなんかしませんよ、
急いでるんです、え？ …だから…静岡じゃなくて静です、そういう苗字なんです
…はい…(切って) なのよ…感じ悪い…すいませーん」

静が声をかけると、小さめのキオスクが浮かび上がる

中に3人のおばちゃんがぎゅうぎゅうの状態で立っている

静

「マイルドセブンライト」

3人、狭い店内で腕とか肘とかぶつけないながらタバコを取り出して

3人

「270円です(バラバラに)」

静

「あの…ちょっとお尋ねしますけど」

古田

「ん？ なになに？」

静 「ときわ銀座って、ここから歩いて行ける距離ですか？」

古田 「ときわ銀座のどこ」

静 「スーバーヘビーというホストクラブなんですけど」

池田 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢ちゃんがね、ときわ銀座まで歩いていけますかって」

池田 「さあーどうだろねえ、おぼちゃんの足じゃ無理だね」

古田 「なに言ってるんのよアンタまだ若いじゃないのーうししししし」

池田 「げへへへへへ」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢ちゃんがね、ときわ銀座に歩いて行けますかーって言うからね、

池田さんに聞いたらおぼちゃんの足じゃ無理ねーなんて言うのよ」

池田 「そしたら古田さん、あんたまだ若いじゃないのーなんて言うのよ」

生瀬 「うべべべべ」

古田 「うししししし」

池田 「げへへへへ」

3人、個性的にひとしきり笑うと真顔に戻る

静 「あれあれ？ …結局どっちなんですか？」

古田 「ん？ なになに？」

静 「行けるんですか？ 行けないんですか？ 歩いて」

古田 「なんだ聞いてなかったの？」

池田 「ん？ なになに？」

古田 「だから、このお嬢さんがね、ときわ銀座に歩いて行けるかって」

池田 「さあーどうだろう、おばちゃんの足じゃ…」

静 「聞きました！ おばちゃんの足じゃ無理なのは分かりました」

池田 「……」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢さんがね、池田さんの足はおばちゃんの足だって言うのよ」

生瀬 「んまー」

静 「言ってもせんよそんな事！」

古田 「あら、おばちゃんの耳にはそう聞こえたわよ」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢さんがね、池田さんの耳はおばちゃんの耳だって…」

生瀬 「んまー」

静 「言っていない、絶対言っていないです」

生瀬 「謝んなさい、あんた池田さんに謝んなさい！」

池田 「もうやめて、私ひとりが我慢すれば済む事なの」

おばちゃんの怒りでキオスクが小刻みにガタガタ震える

静 「わかりました、ごめんなさい、言っていないけどごめんなさい」

静、タクシー乗り場の方へ

タバコを吸おうとして、タバコがない事に気づいてキオスクに戻る

静 「すみません」

古田 「ん？ なになに？」

静 「(探して) さっきタバコ貰いましたっけ？」

古田 「渡したわよ」

静 「ないんですけど」

古田 「渡したわよ、270円もらったもの、ねえ池田さん？」

生瀬 「ん？ なになに」

古田 「このお嬢さんがね、池田さんが270円ネコババしたって言うのよ」

池田 「ううっ！ (悔しがる)」

静 「言ってません！」

生瀬 「いい加減にしなさいよアンタ！ 池田さんになんか恨みでもあんのアンタ！」

静 「違います、私かうっかりタバコ受け取るの忘れたのかなって…」

古田 「そーいうトラブルがないように3人いるんです！」

静 「…そうなんだ」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「3人でやっと一人前のくせに、ですって」

静 「言っでない！ ぜんぜん言っでない！」

生瀬 「こっち来なさい！（と手を伸ばし掴みかかる）おばちゃんナメんじゃないわよ！

おばちゃんナメるとおじさんの味がするわよ！」

古田 「そうよ、おじさんナメてもおじさんの味しかないわよ！」

生瀬 「やだ古田さん、私はなめた事ないから知らないわようべべべべべ」

古田 「嘘ばっかり！ 池田さんは知ってるわよね、ぎいひひひひ」

池田 「ぐふふふふ」

3人、ひとしきり笑って

古田 「ちよっと、なに欲情してんのよ！」

静 「してません！」

生瀬 「え？ なになに？」

古田 「このお嬢さんがね、池田さんの下ネタは生々しいって」

池田 「わああっ（泣き崩れる）」

生瀬 「あんななんかもつと生々しい事してんでしょ！」

静 「してません」

古田 「ウソおっしゃい！ ひとりでホストクラブ行くなんて、
どうしようもないドスケベに決まってるわ」

静 「取材です、雑誌の取材なんです」

古田 「言いなさいよ！ そのいやらしい口で何本くわえたのよ！」

静 「もう、いい加減にしてよっ！」

とタバコを投げつける静

静 「…あっ」

生瀬 「ん？ いま何投げた？」

古田 「なに投げた？」

池田 「なに投げた？」

地面に落ちているマイルドセブンライトにスポットが当たる

生瀬 「(読みづらそうに)…あなたの、健康を、損なう、恐れがありますので

吸いすぎに注意しましょう」

静

「(焦)あ、すいません、私、すいません、勘違いでしたっ、
ここ、このポケットに入れたんだ、なんだそっかあ」

3人

「……」

静 「……すいません、急いでますんで」

と行こうとするが、おばちゃん達キオスクごと動いて立ちほだかる

生瀬

「しゃあないわ、間違いは誰にでもあるんやから、しゃあないやんなあ」

古田

「ほーら関西弁よ……生瀬さんの関西弁出ちゃったわよ」

生瀬

「せやけど自分、濡れ衣着せられた池田さんの精神的ダメージを考えたら自分、
謝って済む問題ちゃうでえ自分、なあ池田さん」

池田

「……死にたい」

古田

「あー、死にたい言うてるわこれ、池田さんこれ、ショックで生理始まってもうたわこれ」

生瀬

「えげつないようやけど、えげつないもんでケリつけなしゃあないで自分」

静

「あの……これ……昼用ですけど(とナプキン出す)」

生瀬

「ナプキンちゃうわ、銭や銭！」

静

「払います！ お幾らですか？」

3人、慌てて相談する

生瀬 「(ドキドキしながら) そ、そやなあ、うちの時給が…500円やから…ろ、ろ、600円もおか!」

池田 「ふっかけ過ぎよ」

生瀬 「だって500円じゃ3で割れないじゃない」

静 「じゃあ千円で!」

3人、あからさまに色めきだつ

静 「あ、ごめんなさい、ひとり千円で!」

古田 「マジで!?!」

静 「どうぞどうぞ(渡し) じゃ、お騒がせしました」

生瀬 「待たんかい!」

静 「なんですかあ(泣)」

生瀬 「こんな大金もろたら、礼言わなしゃーないやんけ、なあ古田さん」

静 「結構ですよ(半泣き)」

古田 「生瀬さんのちよつといい話と、池田さんのちよつといいシャンソン、どっちがいいの?」

静 「:シャンソン:ですか」

生瀬 「知らないの? あたしたちシャンソン教室に通ってんのよ」

池田 「火金でね」

古田 「その先生に褒められて、3人でユニット活動してるの」

池田 「火金でね」

生瀬 「ねずみの三銃士っていうの、たまに公民館借りてコンサートやったり」

池田 「火金でね」

古田 「あとは老人ホームなんかの慰問ね」

池田 「火金でね」

古田 「かーきんかーきんうるせえよ！ 本当は火金以外もやりたいけど、

あんたが週5で仕事入れちゃうから出来ないんでしょ！」

生瀬 「どっちにするのよ、お話？ シャンソン？」

静 「…お話で」

生瀬 「…そう…残念だったわね池田さん」

池田 「♪臭い…おばちゃんの匂い…」

音楽

マイクを取りだしシャンソンを歌う池田

生瀬、古田、踊り出す

以下【歌詞】

池田

「くさい…おぼちゃんの匂い

それはおぼちゃんがおぼちゃんの匂いを消すために使う

おぼちゃんの香水の匂いよ

にふい…おっさんの動き

それはおっさんが「おっさんはもう若くない」と知るたびに落ち込む

おっさんのムダな動きよ

氷川きよしが嫌いなおぼちゃんはいないけど

鈍い獣は本当にいるのよ

ボンジュール、

どんじゅーる、

鈍獣

鈍い獣の流す涙よ

ボンジュール

どんじゅーる、

鈍獣

猛毒なのよ

猛毒なのよ

もう、どうなのよ、

セシボン

(セリフ) 『あなた：今夜は早く帰って来てね、

寄り道しないで帰って来てね

…今夜は…あなたに…お話があるんです…

私：私：方引きがやめられないの…いってらっしゃーい！(手を振る)』

ボンジュール、

どんじゅーる、

鈍獣

鈍い獣の流す涙よ

ボンジュール、

どんじゅーる、

鈍獣…(繰り返し)』

シャンソン歌いながらいつものまにか静をキオスクの中に入れる

古田 「どこまでだっけ？」

生瀬 「ときわ銀座よ」

車のエンジン音がしてキオスクが走り出す

静 「タクシー？ これタクシーなの!? きゃあああ！」

池田 「下込んでるんで、高速乗りまあーす」

静 「きゃあああ！」

暗転

◎ ホストクラブ 「スーパーヘビー」・現在

趣味の悪い電飾や装飾品で飾られた雑居ビル2階の店

下手にバーカウンターがあり、右側が奥の控え室への通路となっている

カウンター左手にはカーテンが掛かっていて、その奥が控え室

バーカウンター上には古いやその日のニュースが流れる電光掲示板

舞台中央やや上手に安っぽいエレベーターがある

他にカラオケセット、ステージ、薄暗い店内に椅子や段ボール箱が積み上げられ、

この店がすでに営業してない事が分かる

中央のエレベーターの前に、台車に乗せられた段ボール箱が数個

ママの順子と従業員のノラがつかみ合っている

ノラ 「なにすんのよ！」

エレベーター開く

風で髪型がグチャグチャに乱れた静が立っている

静 「…何してるのっ！」

慌てて中に入ろうとするが、エレベーターの前の荷物が邪魔で、中に入れない

順子 「誰!？」

静 「週刊太陽、いえ、元週刊太陽の静です」

順子がビール瓶を掴んで振り上げる

静 「…やめなさい！」

荷物を取り越えて順子の手を押さえる静

静 「およしなさい」

順子 「外野はすっこんでろ！」

静 「…外野はともかく、すっこんでろとは何ごとよ」

順子に押されて台車ごとエレベーターに押し込まれる静

静 「：わああー」

エレベーターが閉じて下の階に降りていく
順子とノラ、肩で息をする

急に戦意を失い、椅子に座って休憩
エレベーターが開いて静が入って来る

静 「ひどいじゃないですか、なにするんですか」

同時に再び立ち上がり、ビール瓶を振り上げる順子

静 「こらっ！」

ノラ、携帯電話で受け止めようとする
ビール瓶と携帯電話の激しい立ち回り
ノラ、携帯電話をヌンチャクのように振り回す
良いところで

ノラ 「助けて！ （と静の背中に隠れる）」

静 「えっ！ ストップ！ 落ち着いて！ あ、髪型のことには聞かないで！
分かってるから自分で！ （と直す）」

順子 「：はあ：はあ：」

静 「危ないじゃないですか、そんなもの振り回して、
あなたも、携帯電話なんかで受け止められるわけないでしょ」

順子 「：なんなの？」

静 「髪型の事は聞かないで、お願い、これは事故なの、あっ、メガネがないっ、
メガネも飛ばされちゃって無いんです、これも事故なんです」

ノラ 「メガネかけてるんですか？」

静 「そう、さっきまでね：目が悪いの：やだ可愛い」

ノラ 「私が？」

静 「そうよ、あなたよ、可愛いのに何やってんのよ、もう」

順子 「目え悪いのに分かるんだ」

静 「はい、可愛い女の子大好きなんです、スカウトしてたの、渋谷で、
相手が女だと警戒しないでしょう？ まあ、どっちみち脱いでもらうんだけど」

ノラ 「私、脱ぐんですか？」

静 「あー脱がないで脱がないで、その代わりテープ回しまーす」

順子 「ちよっと！」

静、見本誌を出して

静

「知ってるでしょ？ 週刊太陽、お父さん読んでない？ こう、袋とじの表にさ、1番から10番まで女の子が写ってるさ、この中で脱ぐ娘はだれ？ みたいなさ」

順子、見本誌を取り上げる

静、平然とテープを回して喋り続ける

静

「実際、脱いでるのは専用のモデルなのね、つまりヤラセ。でもたまーに騙されて脱いじゃうコがいるのよ素人で、バカよねえ、80万人が読んでる雑誌なのよお？」

順子、テープを止める

静

「なんですか？」

順子

「なんですかじゃねえよ！」

静

「『じゃねえよ』 って…そんな力まないでよ、まだ始まったばかりじゃない私たち」

順子

「…私たち？」

静

「そんなに上に立ちたいの？ あー、喉乾いた、江田さんは？」

順子

「っーか…なんでケンカしてたのか聞かないんですか？」

静 「ケンカしてたんだ」

順子 「してたでしょう！ 見たでしょう！ 理由を聞きなさい理由を！」

静 「じゃテープ回しまーす」

順子 「回すんじゃねえよ！」

静 「『じゃねえ』って言うのやめてください、ダメなんですそういう…長測的な言い直し、ろくなもんじゃねえ的な、国会議事堂にしょんべんひっかけるしかねえ的な、ありますよ！ 他にすること、いっぱいありますあ、ねえ、そうでしょう？」

順子 「……」

静 「……」

順子 「80万人が読める雑誌だったら勝手に録音してもいいんですか？」

静 「アポ取ってますよ」

順子 「……」

静 「オーナーと話ついていますから、ケンカの理由でしたっけ？ (とテープ回す)」

順子 「…もういいよ」

順子、テープをテーブルにたたきつける

静 「良くないですよ、なんかギンギンに怒ってるし」

ノラ 「私がいけないんです」

静 「はいはい、えーと…何ちゃんだっけ」

ノラ 「ノラっていいます、ノラって呼んでください、

えと、野村のムがどっか行っちゃってノラです、ねえママ、

あ、ママって言っても1コしか違わないんです、ねえママ、

高校の先輩なんです、ソフト部の先輩後輩なんです、ねえママ、

なんの話だっけ？ あ、オーナーが出かけちゃって、

ママと2人つきりになっちゃったんですね、ノラ緊張しちゃうって、

だって先輩だし、すごい、憧れの先輩だし、

でもなんか喋んなきゃ、なんか喋んなきゃって、ウンウンって、ウンウンって」

静 「…なんか軽くムカついてきたんですけど」

ノラ 「そしたら思い出したんです」

順子 「聞かなくていいよ」

ノラ 「あのですね、高2の時ママが…」

順子 「言わなくていいって！」

ノラ 「ママがドブに落ちたんです」

静 「……」

ノラ 「それすごい覚えてるの、ドブに落ちてるママ、ママが落ちてるドブ、…一緒か、

それで『ドブに落ちましたよね』って言ったんです」

上下スエット姿の岡本がスナックを食べながらエレベーターから入ってくる

岡本 「なになに？ なんの話？」

ノラ 「そしたらママ『落ちてないよ』って言うんです、

そんなはずない、ママ忘れてるのかなと思って、もう一回聞いたんです

『ママ、ドブに落ちましたよね』って、

そしたら『落ちてねえよ』って…あ、怒ってる、ママ怒ってる、

そうか、『ママ』がいけなかったんだ、今この店には2人しかいないんだから、

先輩って呼ばなきゃって」

静 「…ドブがいけないんじゃないかしら？」

ノラ 「で、『先輩、ドブに落ちましたよね』って言ったんです…」

順子 「やめなさいよ！ 知らない人にドブに落ちた話なんか！ ていうか落ちてないし！

私、ドブに落ちてないし！」

岡本 「え？ お前ドブに落ちたの!？」

順子 「ほらあ、こうやってバカが食いついて来んのよ」

岡本 「うはあ臭え、ドブ臭え！ 透明バリア！」

順子 「落ちてないつってんじゃない！」

順子、カウンターの中に逃げる

岡本 「確かめてやるう！ スメル探知、スメル探知、スメル探知ロボ岡Z参上！」

岡本、追いかけて順子に抱きついて

岡本 「ロックオン！ 食らえ、ジョリジョリ攻撃っ！（と顎髭を押しつける）」

順子 「江田さんに言いつけるよ」

岡本 「…（離れて）のー、のーのーのー、ブレイクブレイク」

偶然目を合わせる静と岡本

静 「…なんなの？ このつままない男は」

岡本 「カーッ、つままないって言われたあ！ ショック！

目が合った瞬間に分かる俺のつまんなさ、ドブにポイだあっ！」

静 「根本的なこと聞いていいかな？」

岡本 「おい女！ 無視すんな女！」

ノラ 「本当に落ちたんですよ」

静 「ドブの話じゃなくて…ここって、ホストクラブよねえ」

ノラ 「はい」

静 「ホストは？」

岡本 「はい(手をあげる)」

静 「……」

岡本 「はい！ はいはい！ はいはいはい！ (手をガンガン拳げる)」

静 「(順子に) ホストいないのに営業してるんですか？」

岡本 「うわー完全無視！ ありえねー」

ノラ 「はい、オーナーの江田さんが全員クビにしたんです」

静 「どうして？」

順子 「カッコいいから？」

静 「…ホストクラブですよ、ここ」

順子 「『てめえらカッコいいくせにカッコつけてんじゃねえよ！』って灰皿で頭ガンガン殴って放り出したの、そういう男なんです」

静 「…で、残ったのがあれなんだ(と岡本を見る)」

岡本 「(腹出して) うわ、ヘソが臭え！ ヘソからなんか出てる、あ、カレーだ！

裸でカレーうどん食ったのバレバレだあ！」

順子 「あれは客です、結局ダメな40男が集まるダメなカラオケスナックになっちゃって先週潰れました」

岡本 「39ですう」

順子 「ついでに言うと私も客です、下で『順子』っていうスナックしきってます。

(と名刺を渡し) どうします？ 12時過ぎたら江田も来ると思うけど、待ちます？」

静 「いえ始めます」

静、ヘソを拭いている岡本の前に立ち

静 「作家の凸川（でこがわ）隆二をご存じですか？」
岡本 「……」

電話が鳴る

一同、動きが止まる

なぜか誰も出ない

数回鳴って電話鳴り止む

岡本 「知りません」

静 「……」

岡本 「知ってます」

ノラ 「（吐き捨てる）バカ」

静 「どっちなの」

岡本 「なんスか？」

静 「なんスかじゃないわよ、なんで今ウソついたんですか」

岡本 「すみません、なんか緊張しちゃって、ぶひ（愛想笑い）」
静 「私、1年ほど前まで凸川先生の担当だったんです。
ちやうどウチで先生の連載が始まった時です」

静、一冊のハードカバー本をテーブルに置く
『鈍獣』

岡本 「あー俺、本とか読まねえから」
静 「でもタイトルくらいは地元の作家なんだから知ってるでしょ」

岡本テーブル上の本を手にとって

岡本 「…どん、どんどん」

ノラ 「鈍獣」

岡本 「お前読んだの？」

ノラ 「（無視）」

岡本 「ふーん」

静 「途中で私は担当を外れたんですが、本の売れ行きが好調なので
お祝いの電話をしたんです…ところが、つかまらないんですね、

高円寺の仕事場に行ってみたらもう半年前に解約してて…
要するに失踪したんです」

岡本 「…へー」

静 「そうなんです」

岡本、緊張に耐えられず静を避けるように席を移動
静、追いかける

岡本 「(順子に) 江田っちは？」

静 「調べたら先生はこちらのご出身なんです、そして江田さんと岡本さん、

つまり貴方とは年齢も一緒です、同級生です、人口1万弱の狭い町です、

しかも小説家として本も出してる有名人です、

そういった事実を踏まえてもう一度質問に答えてください、

凸川隆二先生をご存じですか？」

岡本 「知っています」

静 「……」

岡本 「知りません」

静 「なんでウソつくの!？」

岡本 「…なんか怖えんだもん」

静 「幼なじみが行方不明になってるの、ウソついでる場合じゃないでしょ！」

突然、静のオッパイを触る岡本

静 「……なあにしてんの！」

岡本 「え？」

静 「なんで触ったのよ、今」

岡本 「知らねえよ、なんか、オッパイ突きだして怒ってるから」

静 「突きだしてないわよ！」

岡本 「知らねえよ、なんか、あつたから触っちゃったんだよ」

静 「…それは…それは我慢するのが大人でしょう」

岡本 「大人とか子供とか関係ねえよ、なんかわーわー色々聞かれるし怒ってるし

オッパイ気になるし、俺バカだから一個ずつ解決するしかねえから、

まず目の前のオッパイから片づけようと思って」

静 「…（ノラに） いつもこうですか？」

ノラ 「いつもこうです」

順子 「ウチらからしたら、あなたが怒ってる事が逆に新鮮ですね」

静 「なんで？ あの子の方が大きいでしょ（ノラを指す）」

岡本 「大きさとか関係ねえよ、あつたから触ったんだよ！」

静 「あったからって…そんなんで納得すると思うの!？」

岡本 「おめえの気持ちとか関係ねんだよ! あったから触ったんだよ!

あつたから触ったんだよ!」

静 「…:大変なところへ来てしまったわ」

岡本、週刊太陽を手に取り迷わず袋とじを開けようとする

順子 「なにしてんの!!」

静 「え？」

順子、血相を変えて週刊太陽を奪う

岡本 「…(半泣き) なんなんだよ、俺は袋とじも見ちゃいけねえのかよ」

静 「…なにも泣かなくても」

岡本 「…泣きたくなるよ、なんだよ、女3人して俺のことイジメて」

順子 「イジメてんじゃねえよ、注意してんだよ!

いい大人が週刊誌手にとって迷わず袋とじ開けてさあ、どんだけスケベなのよ、他に読むところあんじゃ、80万人が読んでるんだよ! ねえ静さん!」

岡本 「返せよおお! (手を伸ばす)」

順子 「これはこの人のもんなの、この人の袋とじなの！」

静 「さ、差し上げます、差し上げますから来ないで」

岡本 「(号泣) 気になるんだよお、どの娘が脱いでるか気になって眠れねんだよお」

ノラ 「専門のモデルがいるんですね」

岡本 「たまに素人でも脱ぐバカがいるんだよバカ！ あれ？」

順子、すぐに雑誌を奪ってゴミ箱に捨てる

ノラ 「どうしたの？」

岡本 「いや…なんでもねっす」

静 「なんか思い出したの？」

岡本 「そうじゃなくて…(順子を指し) こいつが写ってた」

順子 「……」

岡本 「8番の女、こいつにソックリでした」

ノラ 「ママ……」

順子 「…やめてよ、たまたま似てる女が写ってただけでしょ？ 私じゃない」

一同 「……」

順子 「あたしよ！ スカウトされたのよ渋谷で！ あんたじゃないわよ、

もっとなんか帽子被った太った女、杉作丁太郎みたいな女に、杉作丁子に」

ノラ 「脱いだんですか？」

順子 「なわけないじゃん！ 表だけよ、写真撮って五千円もらって終わりよ」

岡本 「じゃあいいじゃん、見せろよ」

順子 「へんなの写真が、腫れてるの顔が、だからヤなの！」

静 「どれどれ」

とカバンから週刊太陽3冊を出して配る

順子、雑誌を破る

静 「確認して、確認して、わたし目え悪いから」

順子 「あっ、ちょっと！ なんで配るの!？」

3人、袋とじを開いてしばし見入ると、黙って閉じる

順子 「なんか言えよ！」

一同 「(首を振る)」

順子 「：感想とかないのかよ！」

静 「顔腫れてないですよ」

順子 「アーツ！」

ノラ 「大した事ないですよ、ドブに落ちたと思えば」

順子 「殺そうか？」

岡本 「つーか江田っちにバレたらどうすんだよ」

順子 「……」

岡本 「80万人が読むんだぞ、なに考えてんだよ、大人だろ？ 24だろ？

こんな事したら自分の家族とか恋人が悲しむ事ぐらい容易に想像できる年齢だろ！
ねえ静さん！」

静 「…急にまともな事言うわね」

岡本 「俺は江田っちの親友として言っただよ、そんなに脱ぎたいなら…

せめて顔ぐらい隠せよ！ 江田っちはなあ、脱ぎながら笑ってる女が
大ッ嫌いなんだよっ！」

順子 「刺激が欲しかったのよ、刺激が欲しかったのよお！（泣き崩れる）」

岡本 「…2回言うほど欲しかったそうです」

順子 「どうしよう…江田に見られたらどうしよう」

静 「大丈夫、明日は火曜日、週刊太陽の発売日よ。あと数時間すれば

次の号が全国のコンビニやキオスクに配送されてこの号は回収されます。

そうなれば歯医者待合室にでも行かない限り、
アナタはヌードになったという事実から解放されるの、そんなもんよ週刊誌なんて」

と週刊太陽を集めてゴミ箱へ捨てる
エレベーターが開いて江田が週刊太陽を小脇に抱えて入って来る

江田 「いやーどうもどうも、お待たせしてすみません」

順子 「!？」

江田 「おい順子、順子、おめえ後で話あるから」

順子 「…はい」

江田 「いやー忙しい忙しい、それにしても忙しいですわー、どうぞお掛け下さい、しかしなんで1日は24時間なんでしょうねえ、

僕はねえお嬢さん、この町内で12の飲食店を経営しているわけですが、

まーその集金だけでも半日かかりますわ、もちろんそれぞれ店長雇ってますがね、

んまー人間はサボりますからねえ、今日もここ来る前に回転寿司行ったら

パキスタン人の店長と中国人の板前がUNOやってみましたわ、

パキスタンと中国が日本でサボるなーちゅうてまあ鉄拳制裁ですわ、

まー要するに忙しいという事ですわ、はい」

江田、早口で喋りながら全くムダのない動きで静の前に座る

順子に週刊太陽を渡す

ノラの差し出した灰皿にタバコの灰を落とす

上着を脱いで岡本に渡す

カウンターに入ってビールを二本出して、ぐっと一口飲む

携帯を取り出して、メールをチェックして、

という一連の動きをセリフとシンクロさせ、

セリフ終わりでちょうど椅子に到着

静 「すいません、聞いてませんでした」

江田 「はい？」

静 「いまの話もう一回してください」

江田 「…はい」

江田、ビールとかタバコとか新聞を元に戻して位置に戻り
エレベーターの中に入り、もう一度出て来る

江田 「いやーどうもどうも、お待たせしてすいません」

順子 「!？」

江田 「おい順子、おめえ後で話あるから」

順子 「…はい」

江田 「いやー忙しい忙しい、それにしても忙しいですわー、どうぞお掛け下さい、

しかしなんで1日は24時間なんでしょうねえ、
僕はねえお嬢さんこの町内で12の飲食店を経営しているわけですが、
まーその集金だけでも半日かかりますわ、もちろんそれぞれ店長雇ってますがね、
んまー人間はサボりますからねえ、今日もここ来る前に回転寿司行ったら
パキスタン人の店長と中国人の板前がUNOやってみましたわ、
パキスタンと中国が日本でサボるなーちゅうて鉄拳制裁ですわ。
まー要するに忙しいという事ですわ、はい」

一言一句、一挙手一投足違わぬ動きで椅子に到着する江田

静 「すみませんテープ回ってませんでしたのでもう一回お願いします」

江田 「…別に録音するような話じゃないよ」

静 「証言は一言一句聞き逃したくないんです」

江田 「……『いやー忙しい』からでいいですか？」

静 「は、」

江田、位置に戻って

江田 「いやー忙しい忙しい…ようするに忙しいんですわ（椅子に到着）」

静 「お忙しいところすいません、元週刊太陽の静です（名刺出す）」
江田 「オーナーの江田です、電車で来られたんですか？」
静 「ええ、最終で、電話でもお話したとおり」
凸川隆二先生の失踪事件に関するルポを書いています」
江田 「そうそうそう、そう思ってたら載ってませんでしたよ、
代わりに愛人のヘアヌードに遭遇して膝が抜ける思いでしたわ」
順子 「泣く」
江田 「泣くんだったら脱ぐな！」
岡本 「脱いで笑っていいのはアメリカ人だけ！」
静 「すいません…ずいぶん前に異動になって、記事の方はそちらの雑誌で書いてるんです」
江田 「へえ、なんていう雑誌ですか？」
静 「…それはまあいいんですけど、今日は先生と江田さんの関係について…」
江田 「ちょっと待った、初めに断っておきますが、私、その凸川先生って人…」
静 「知ってるはずですよ、少なくとも岡本さんは知ってるそうです」
江田 「……喋ったんだ」
岡本 「喋ってません（間髪入れず）喋りました」
江田 「そおなんだあ（睨む）おめえ喋ったんだあ、忙しい俺をさしおいて、
暇なお前が喋ったんだあ」
岡本 「…ぶひび」

静

「私だって子供の使いじゃないんですよ江田さん、凸川先生は今年に入って出版契約の変更を申請しています（と、契約書を出し）ほら、印税の受取人があなたの名前に変わってるんです、ほら、判子も押してあります、これはどういう事ですか？」

江田

「…さあ」

静

「さあじゃないでしょう、あなたが凸川先生の失踪に何らかの形で関わってるという証拠じゃないですか」

江田

「…自殺でもしたんじゃないですか？」

静

「確かにマスコミでは自殺という説が有力です、でも違うんです、先生は殺しても死なない人なんです、先生は」

電話が鳴る

やはり電話に出ない一同

静

「出なくていいんですか？」

江田

「（遮り）分かりました、お話ししましょう、しかし！ タダというわけにはいきません」

静

「もちろん、謝礼はお支払いします」

江田

「…うちはホストクラブです、そして私はナンバーワンホスト、ここはひとつ、ドンペリの赤を1本入れて頂きたい！」

順子 「ひゅ〜（口笛を吹く）」

江田 「…（順子を殴り）少々お値段は張りますがそのぶん濃厚なサービスを致しましょう」

静 「時間がないんですけど」

江田 「（マイクで）へいへいへい！ 『スーパーヘビー』 恒例のお

どうおーんペーりでやあーんす！」

静 「どんべりでやんす？」

順子 「ドンペリダンスよ！」

岡本 「やべえよやべえよ！」

江田 うちのドンペリダンス見たらもう正気じゃいられないよ姉ちゃん！」

江田 「カモン、ドンペリダンス！」

MUSIC IN

パラパラみたいな音楽とともに照明がガラッと変わり

岡本、順子、ノラ「江田さん！ 江田さん！」と大騒ぎ

江田 「熱い！ やばい！」

3人 「間違いない！」

江田 「はいドンペリドンペリ…」

勢い込んで踊り出した途端に、マイクのコードが届かず

無様に転ぶ江田

音楽も止まる

慌てて駆け寄る順子

江田、痛がりながら立ち上がり

江田 「…だからワイヤレスにしろっていったら…あーもう最悪、音楽も違うし」

岡本 「ああ、こっちか」

岡本、次々にCDの曲を流すが、どうやら江田的には違うらしい

江田 「違う！ もっと速いやつ！」

岡本 「え？ これ？」

江田 「違うよ、7曲目だよ」

岡本 「今の7曲目だけ…」

江田 「違うんだよ、もっとこう（歌う）パッパッパッパッパッってやつ」

岡本 「これだって、これでいつも踊ってんじゃない」

江田 「じゃあいい！ やめた！ ナシナシ！ ばか！ プン！」

江田、怒ってマイクを投げ出す
ソファでふてくされる

順子 「……命拾いたねえ」

静 「……え〜？ なんなの？ なにがしたいのか全然分からない」

岡本、江田に話しかけるが、江田は無視し続ける

岡本 「なに江田っち、あれいつだっけなあ凸やん来たの」

静 「来たの？」

岡本 「喋っていい？ 江田っち、俺、喋っちゃうけど、いい？」

ああ、思い出した、まだ明がいたからオープンの日だ、8月です8月」

ノラ 「7月28日です」

順子 「よく覚えてんじゃん」

ノラ 「……」

岡本 「駅前で凸やん見たって母ちゃんが教えてくれたんすよ、まーババあの言う事だから
当てになんねえと思ったんすけど一応江田っちに報告しようと思って……」

とか言いながら再現の準備を始める

照明、電飾などが点いて、店の雰囲気は1年前に戻る
端っこの席で江田が明（顔は見えない）に説教している

◎ スーパーヘビー・過去（一年前）

江田 「てめえはよお、だいたい新人のくせに俺より高いタバコ吸ってんじゃねえよ！
（とかセコい理由で説教）」

岡本 「うわ！ ヘソがイカ臭い！ 裸で塩辛食ったのバレバレ！」

江田 「うるせえ！」

岡本 「：順子ちゃん開店おめでと…って言いてえとこだけど」

順子 「なによ」

岡本 「客はともかくホストは？」

順子 「みんな帰した」

江田 「明、お前も帰っていいぞ」

明、うつむきながらエレベーターに乗る

岡本 「やっぱり無理なんじゃねえ？ こんなクソ田舎でホストクラブなんてさあ」

江田 「文句はいいから用件を言え、暇人」

岡本 「用件用件…ああそうだ！ 江田っち、びっくりすること言っていない？」

江田 「暇なお前が多忙な俺をビックリさせるんだあ」

岡本 「凸やん帰ってるって」

江田 「……」

岡本 「母ちゃんが駅前で見たって…」

江田 「……」

岡本 「江田っち」

江田 「…ううあ！」

岡本 「ビックリしたあ！」

順子 「なになに？ なんなの？」

江田 「…やっぱあれ、凸やんだったんだ」

岡本 「え、もう会ったの!?!」

江田 「変なのとすれ違ったんだよ、ガード下でおっさんがカラスとケンカしてたんだよ」

岡本 「ううあ！ 凸やんだわ！ それ絶対凸やんだわ！」

江田 「ううあ！」

順子 「なによ、なんなのよう」

江田 「で？ あいつなにやってんの？」

岡本 「東京に住んでんだって」

江田 「ううあ！」

岡本 「東京で小説書いてるらしいよ」

江田 「ううあ！」

岡本 「UAの全力疾走」

江田 「ううあ！」

岡本 「しかもトップレス」

江田 「ううあ！」

岡本 「UAの里帰り、親戚一同UA顔」

江田 「ううあ！ ううあ！ ううあ！」

順子 「UAの…」

江田 「うるせえ、お前入ってくんな」

順子 「……」

江田 「凸やんかあ…なんか微妙だよなあ」

岡本 「今さら喋ることないしな」

江田 「俺だってねえよ、中学以来一回も会ってねえもん…だれ？」

ノラがエレベーターを降りて入り口に立っている

順子 「知らない」

江田 「なんだよ、なに怒ってんだよ順子ちゃん」

順子 「怒ってないよ客でしょ？」

ノラ 「…ママ先輩？」

順子 「え？」

ノラ 「ノラです、野村です、ソフト部の！ レフトの！」

順子 「…ああ…久しぶり」

ノラ 「ママ先輩、何してんですかあ、こんなところでえ（と抱きつく）」

岡本 「おまえ高校の時からママって呼ばれてたの？」

ノラ 「そうなんです、すごい先輩なんです、何がすごいって…声？

ママ先輩が声出すと相手がビビって試合にならないの

『気合い入れろこんにゃろー！』って『金玉ついてんのかこんにゃろー！』って、
相手が『え？』ってなった瞬間に打ったり投げたりするんです」

順子 「野村さんだっけ？」

ノラ 「ノラですよ」

順子 「今日は帰った方がいいよ」

ノラ 「え？」

江田、すかさずノラの前へ

江田 「あーそうなんだあ、順子の後輩なんだあ、なに飲んでんの？」

ノラ 「まだ何も」

江田 「ドンペリ入りまあす！」

岡本 「ドンペリ入りまあす」

ノラ 「ちょっと、待って下さい、私、明くんに会いに来たんです。お店移るって言ってたから」

江田 「辞めましたよ」

ノラ 「え？」

江田 「カッコいいからクビにしました、明の客なんだ」

ノラ 「はい、今日オーブンだからドンペリ入れてあげるって約束したのに…辞めちゃったんだ」

江田 「へいへい、元気だしなよう」

ノラ 「…ありがとうございます」

江田 「ドンペリ入りまあす！」

岡本 「ドンペリ入りまあす」

ノラ 「入れませんよ」

江田 「ドンペリ入れたらドンペリダンス踊っちゃおうよ」

ノラ 「おじさんが？」

江田 「そうおじさんが…おじさんって言われた…（傷つく）」

ノラ 「あ…すみません、素敵です、年上ぜんぜん平気なんです私」

江田 「…えへ…じゃあ行っちゃおうよ！ レッツゴードンペリでやあーんす！」

MUSIC IN

江田 「熱い！ やばい！」

岡本 「間違いない！」

激しくドンペリダンスを踊る江田

* () 内はかけ声

バーカウンター上の電光掲示板に掛け声が流れる

江田 「どーんどんどんドンペリドンペリ

(江田さん)

ドンペリドンペリ

(江田さん、江田さん)

ドンペリ

(江田さん)

江田さん

(ドンペリ)

(江田さん、江田さん、いい男)

ヒューツ!!」

静、岡本の側へ行って話しかけるが、岡本はダンスに夢中
静、音楽を小さくする

岡本だけダンスをやめて

岡本 「これ19番まであるんで」

静 「長いよ！ ほとんど『江田さん』しか言っていないんだけど」

順子 「江田さん江田さん江田江田江田さん」

岡本 「じゃあちょっとはしよって」

江田 「5, 6, 7, 8

江田さん

(抱いて)

江田さん

(抱いて)

(江田さん江田さん壊れちゃう)

(江田さん江田さん壊れちゃう)

(江田さん、ドンペリみたいどーんーん！)

すかさずドンペリを大ジョッキに注いで一気飲みして

江田 「50万円です」

ノラ 「…高い」

静 「ジョッキで飲んだらドンペリ台無し」

ノラ 「…ごめんなさい、お金ぜんぜん足りないかも」

江田 「…あ？」

ノラ 「せいぜい2万円ぐらいだと思って…あの、来月じゃダメですかあ？」

江田 「…順子」

順子、前に出て

順子 「てめえこのヤロー金もねえくせにドンペリ入れてんじゃねえこのヤロー！

ドンペリはホストの魂なんだこのヤロー！

こっちは魂売ってんだから金払えよこのヤロー金玉ついてんのかこのヤロー！

ついてねえよ金玉なんかこれっぽっちもついてねえよこのヤロー！」

ノラ 「(泣く)」

江田 「俺あよ、おっぱい姉ちゃん、若いころ人ひとり殺してんだよ、

なあおっぱい姉ちゃん、ここで働くか、あるいは汗臭いオッサンが

ギユウギユウに乗り込んだ汗臭い漁船に揺られて汗臭い島で汗臭い軍手して

汗臭いタオルで汗臭いオッサンの汗拭いて暮らすか…」

ノラ 「ここで、ここで働きます！」

江田 「OK、じゃあ奥で制服に着替えて」

ノラ 「制服？」

順子 「…だから帰れって言ったじゃん」

ノラ 「制服ってなんですか？ 制服ってなんですか？」

順子、ノラをカーテンの奥に連れて行く

静 「…この店のシステムはだいたい分かりました」

岡本 「念のため言っときますけど『人殺してんだよ』っていうのは江田っちの口癖っていうか、

内田裕也で言うところの『ファッキン』ぐらいの意味じゃないんです」

静 「で、先生は？ ここまでハッキリ言っただけのムダですから…」

エレベーター開く

凸川 「…おしまい？」

静 「え!？」

いつの間にかエレベーターの入り口に立っている凸川

無精髭の、かなりくたびれた男である

凸川 「…おしまい？」

岡本 「…いえ…まだやっていますけど」

凸川 「いやー参ったよお、ガード下でカラスに目え突かれてちゃって」

江田 「…凸やん？」

凸川 「おお、江田くん」

岡本 「うそ、凸やん!？」

凸川 「……ああ岡本くん」

江田 「…ううあ！」

岡本 「…ううあ！」

凸川 「入っていいかな」

岡本 「…いい、いいよ、いいけど…なあ」

江田 「…あ、ああ、入れよ」

凸川が入ってくると思わず身構えてしまう江田と岡本

凸川 「なんだよ、俺なんか変？」

江田 「変じゃねえよ、変じゃねえけど、なんか、あまりに自然で、なあ」

岡本 「25年も会ってないのに、なあ」
江田 「…え？ほんとに凸やん？」
凸川 「……うん」
江田 「え？え？今なんで考えた？」
凸川 「いや、そう呼ばれんの何年ぶりかなあとと思って」
岡本 「いや、だから25年振りだつて」
凸川 「…あそお」
岡本 「『あそお』つて、やっぱ凸やんだわ」
江田 「凸やん、なんか飲む？」
凸川 「んん？ああ…なんか飲むわ」
江田 「……凸やんだよ」
岡本 「凸やん、どこ泊まってんの？」
凸川 「んん？ああ…なんかそのへん」
岡本 「凸やんだあ！」
江田 「凸やん、ビールでいい？」
凸川 「ビール？ああ…ビールのことか」
江田 「…凸やんだよ」
静 「ちよつといいかしら」
岡本 「なんすか？」

静 「なんだか：私知ってる凸川先生と違う気がするんですけど」

岡本 「だったら、あんたもなんか話しかけてみなさいよ」

静 「いいんですか？」

岡本 「本当はダメだけどな」

静 「：凸やん、今日なに食べた？」

凸川 「(答える)」

静 「：先生だわ」

岡本 「ほんとかよ」

江田 「たまに岡じーと話してたんだよ、凸やんどうしてるかなあって、なあ」

凸川 「いやあ、こんな感じだよ、ずっとこんな感じだよ」

岡本 「俺もこんな感じだよ、江田っちはいろいろあったけど」

江田 「30まで歌舞伎町で働いてただけど、色々あって帰って来て、

ほら2組の新井っていたでしょ、サッカー部のマネージャーの、

デブなんだけどちよつと可愛いって、凸やんよく言ってたじゃん、

『惜しいなあ、デブじゃなかったらなあ』って」

凸川 「：覚えてないわ」

江田 「：覚えてねえよな、うん、その新井と結婚したんだ俺」

凸川 「それはそれは：なんかお祝いしなきゃ」

江田 「うん、いい、もう9歳の娘とかいるから」

凸川 「……へえ、そうかあ、江田くんは、デブと結婚したのかあ」
江田 「……うん、今はデブじゃないんだけど」
凸川 「岡本くんは？」
岡本 「あー、俺は1コ上の中島という先輩と結婚した、放送部の、ほら、
凸やん放送室でチンコぎゅーってされたって騒いでたじゃん」
凸川 「……ごめん、覚えてないわ」
岡本 「……覚えてないか」
凸川 「……ごめんね、奥さんなのに」
岡本 「うん、もう別れたし……あ、凸やんて言ったらアレだ、ほら、裏山の」
江田 「そうそう、うちの裏山に大麻生えてるから取りに行こうって、
見るからに山菜なのに凸やん『大麻だー大麻だー』って、
こんななって踊ってたよなあ」
凸川 「ああ、はははは」
江田 「あはは、あれ笑ったわあ」
凸川 「覚えてないわ」
江田 「……えー」
岡本 「……あとほら、1年の時、4階のトイレ詰まらせてさ」
江田 「あーそうそう、それ知らないで凸やん入っちゃって……覚えてないだろ」
凸川 「覚えてないわ」

江田 「……」

岡本 「……」

凸川 「……江田くん…だよね」

江田 「……うん江田くん、だと思っけど…自信なくなってきた」

凸川 「…ごめん、記憶力あんまないから」

江田 「いやいや、俺らが覚え過ぎてんだよ、こんな田舎でさ、

こんな連中とばっか飲んでると昔話ぐらいしかする事ねえし」

岡本 「凸やん、なんか覚えてないの？ 中学ん時のこと」

凸川 「中学かあ…」

ものすごい長く、沈黙が続く

江田 「……………凸やん？ 凸やん小説書いてんだって？」

凸川 「書いてないよ」

江田 「……あーそう」

凸川 「書けるわけないじゃん小説なんか」

江田 「……（岡本を睨む）」

岡本 「……あれー（しきりに首を傾げる）」

再び沈黙。微動だにしない3人
ノラがエッチな感じの制服に着替えて現れる
凸やんだけ目で追う
いい感じのBGM

岡本 「……どうした？」

凸川 「だれ？」

岡本 「ああ……おまえ名前なんだっけ」

ノラ 「……野村です」

凸川 「あは、どうも」

江田 「なに、凸やん気に入ったんだ」

凸川 「帰るわ」

江田 「えー！？」

岡本 「もう帰るの？」

江田 「(岡本を睨む)」

凸川 「もうちょっといようかな」

江田 「(間髪入れず) 送ってくよ、ちょうど出かけるから」

凸川 「いいよ、近くだし、じゃ、元氣そうで安心したよ、また来るわ」

江田・岡本 「……おう(手を振る)」

出て行く凸川

エレベーター閉まる

緊張から解放される2人

江田 「……おめえ小説書いてるつったじゃねえか！」

岡本 「俺じゃないよ、母ちゃんが言ってたんだよ」

江田 「…(ため息) はあ…疲れた…」

岡本 「でこ疲れた」

江田 「この疲れ込みで凸やんだよなあ…まあいいや、あの分じゃもう来ねえな」

岡本 「来るとしてもまた25年後だよ」

ノラ 「あの、私、何すればいいんですか？」

江田 「ああ、そのへん座ってればいいから、客が来たら適当に相手して…」

ノラ 「いらっしやいませ」

エレベーター開く

凸川、何事もなかったかのように入って来る

凸川 「……おしまい？」

江田 「…ええ？」

凸川 「もう、おしまい？」

江田 「おしまいじゃねえけど…忘れ物？」

凸川 「いやー参った、カラスまだいた」

江田 「……」

凸川 「座っていいかな」

◎ スーパーヘビー・現在

照明、現在に戻る

岡本 「その日は結局朝方まで、特に盛り上がりもせず、かといって帰れとも言えず、

苦い時間を過ごしましたとさ」

静 「『小説なんか書いてない』って、先生そう言ったの？」

岡本 「はい、書ける訳ないって」

静 「去年の夏って、ちょうど連載スタートの時期ですけど」

岡本 「そうなんスカ」

静 「…それにしてもお2人にとって、その、凸やんが、どういう存在だったのが、もうひとつ分らないんですけど」

岡本 「あー、それはちょっと複雑なんですよねえ、まず、凸やんて言うあだ名の由来から…」

江田 「おい！」

ノラ 「…バカ」

静 「凸川って…あだ名なんですか？」

岡本 「本名ですよ」

静 「…今わりとはっきり『あだ名』って言いましたよね」

岡本 「あだ名です」

江田 「本名は田中だか田代だか…そんな感じだったよな」

岡本 「…（頷き）ごめん」

静 「…ずっと本名だと思ってました」

江田 『凸凹の凸に川で凸川って、地元じゃ珍しくないんだ』って先生言ってたから」

「もともと小学校の時にいたんですよ凸川ってヤツ、すごい独特な、

何とも言えないキャラクターで、そいつが凸やんて呼ばれてて。

凸やんが凸やんて呼ばれるようになったのはその凸やんに似てるからなんですよ」

静 「…んー確かにちよっと複雑」

江田 「初代の凸やんは5年か6年で引っ越しちゃったんです、で、その後に凸やん、

あんたが探してる方の凸やん、そいつと中学で会って、

俺ら2人『凸やんに似てねえ？』つって盛り上がって、

その時点で凸やんは凸やんのこと知らなかったんだけど、

いつの間にか凸やんて呼ぶようになって…

あだ名ってホラ、そういうもんじゃないですか」

静 「どういう方なんですか？」

江田 「どういう方？」

静 「ですから、あなたの同級生の：あ、どっちも同級生か、えー元の凸川さん」

江田 「だから、なんとも言えないんですよ」

静 「でも、似てるんですよね先生と」

江田 「凸ちゃんも何とも言えないヤツだから」

静 「：なんか、なんにも伝わって来ない」

江田 「ええ、なんにも伝えられてないですね」

岡本 「今で言うと、イジメられっ子みたいな」

江田 「いや、そういうんじゃない、もっところ、つい、からかいたくなる」

静 「マスコットの存在？」

江田 「マスコットじゃない、マスコットはぜんぜん違う」

岡本 「のび太みたいな感じかな、ドラえものの」

江田 「ぜんぜん違う、ぜんぜん違う、メガネかけてねえし」

静 「要するにちょっと変わった子なのね」

江田 「いや、むしろどこにでもいる普通の子だと思うけど」

静 「：やっぱり伝わってこない」

江田 「分かんねえ人だな、もっところ、オールマイティな言葉なんですよ」

岡本 「例えば、掃除の時間にジャージの上だけ忘れて、
仕方なくワイシャツの裾ジャージに入れて掃除してるやついたでしょう」

静 「…ああ、いましたね」

岡本 「それ、なんて言います？」

静 「なにつて…そういう恰好のこと？」

岡本 「はい」

静 「…ダサイ？」

岡本 「あーダサイねえ」

江田 「ウチら『凸やん』て呼んでたんです」

岡本 「凸やん、あるいは凸やんスタイルね」

静 「…ちよつと伝わってききました」

岡本 「じゃあ飯食う時、めっちゃめっちゃ大量に口ん中に入れるヤツいるでしょう」

静 「…あーいますいます、うちの編集長がそうです、なんかみすぼらしいの」

岡本 「そういうのうちら『凸やん』って呼んでたんです」

江田 「あるいは『凸食い』な、でまた食ってんのが凸やんライスなんだよ」

静 「なんですかそれ」

岡本 「ご飯に醤油とシーチキンの油だけかけて、ご飯テカテカにして食うんですよ、
なんかお寿司っぽい味がするって」

江田 「あと凸走りな」

岡本 「あーそうそう、走る時にこう、手がパーになって、

それがめちゃめちゃ速く動くんだけど、ぜんぜん前に進まないのな」

江田 「使い方としては『凸やんが凸やんスタイルで凸やんライス凸食いして凸走りて帰った』
ってなるわけ」

静 「…なんとなく掴めてきました、

要するに『凸やん』ていうのは『笑える』っていう意味なんですね」

江田・岡本 「ぜんぜん違う」

静 「あーもーじゃあなんなの!？」

岡本 「知らねえよ、凸やんは凸やんだもん」

江田 「あんたジャーナリストだろ？ 言葉で食ってんだから言葉にしてくれよ」

静 「だらしがない？」

江田・岡本 「違う」

静 「どろい？」

江田・岡本 「違う」

静 「ばか？」

江田 「ひでえな、こんだけ喋らせといて『ばか』で片づけんのかよ、それでも物書きなの？」

静 「悔しい、絶対当ててやる、情けない？」

江田・岡本 「違う」

静 「鈍い」

江田・岡本「……違う」

静 「いまちよっと考えたでしょ」

江田 「いや、違うよ、違うけど、なあ」

岡本 「今のところ『鈍い』が一番近いかもしれないですね」

江田 「ていうか、全部当たってるんだけどね」

岡本 「ぜんぶひっくるめて凸やんなだよな」

静 「で？ その元の凸川さんは今どうされてるんですか？」

電話が鳴る

静 「出なくていいんですか、電話、ねえ、電話鳴ってますよ」

江田 「死にました……凸やん、死にました」

岡本 「……江田っち」

江田 「いいんだよ、たぶんこの人知ってるから……凸川先生の小説に書いてある通りですわ」

静 「……やっぱり実話だったんですか（と『鈍獣』を手取る）」

岡本 「確か明が駅前の回転寿司で働き始めた頃だよな、

江田っちに頼まれておたくの雑誌買いに行ったんです」

店内BGM

◎ スーパーヘビー・過去（週刊太陽が発売された日）

江田が板前姿の明（顔は見えない）に説教している

江田

「中国人中国人というけど、おめえより全然仕事できるぞ、オレに言わせりゃお前の方が中国人なんだよ！（とか）」

離れた席で凸川とノラが飲んでいる

江田の携帯が鳴る

江田

「…明、もう帰っていいから」

明、うなだれて帰って行く

江田

「もしもし…ああ？ 違うよバカ、週刊大衆じゃなくて週刊太陽、使えねえなお前は…来てるよ、なんかピスタチオ凸食してるよ、うん…殻ごと凸食い、ちよっと心配…おい凸やん？ 凸やん!？」

江田、受話器を切って凸川とノラのほうへ

ノラ 「見て見て、凸やんさんたらピスタチオ食べた事ないんだって、ウケる」

江田 「ノラ、今日もう上がっていいから」

ノラ 「えー？ もっと凸やんさんと飲みたい」

凸川 「じゃあ俺もそろそろ…」

江田 「まだいいじゃん、岡じーもうすぐ来るし…あ、久し振りにあれやんねえ？

デコデコじゃんけん」

凸川 「…ごめん、覚えてないわ」

江田 「簡単だよ、デコデコじゃんけんホイホイホイだよ、最後のホイで片方引っ込めるの」

ノラ 「知ってる！ 小学校の時流行はってました」

江田 「うそ、すげえな凸やん、こいつデコデコじゃんけん知ってるってさ」

凸川 「ああ…はははは…」

江田 「いくぞ、デコデコじゃんけんホイホイホイ」

とジャンケンが始まる

両手でジャンケンして片方だけ引っ込める

江田が勝つ

次の瞬間、江田のピンタが凸川の顔面にヒットする

凸川 「……」

江田 「…あれ？ 言ってなかった？ 勝ったらビンタしていいんだよ、そうだよな」

ノラ 「……」

江田 「引いてんじゃないよ、さ、やろうぜ」

凸川 「ああ」

江田 「デコデコじゃんけんホイホイホイ」

江田、再び勝って凸川にビンタする

江田 「思い出した？」

凸川 「……」

ノラ 「…じゃあノラ、上がりまーす」

江田 「帰んな！」

ノラ 「色々あるんです、えっと、ワンちゃんにエサあげたり、給料明細を見たり、えっと…」

江田 「デコデコじゃんけんホイホイホイ」

江田、勝って凸川にビンタする

凸川、口の中を切って血を流す

ノラ 「ママー！ ママ先輩いー！（と、奥へ）」

江田 「なんでもねえよ、ピスタチオの殻で切っただけだよなあ凸やん」

凸川 「…あはは」

江田 「どんなの書いてんの？」

凸川 「え？」

江田 「読ましてよ、小説、凸やんの」

凸川 「…だから小説なんか書いてないって…」

江田 「デコデコじゃんけんホイホイホイ」

江田、凸川にビンタするが凸川よける

凸川 「なーんて」

江田 「あの事、書くつもりだろ」

凸川 「あの事？」

江田 「俺と凸やんが最後に遊んだ日の事だよ」

凸川 「…覚えてないわ」

江田 「またまたあ、凸やんが死んだ日だぞ」

凸川 「…やめようよ、江田くん」

江田 「中3の二学期、県の水泳大会があつて、午前中で授業が終わった日、お前と俺と岡じーの3人で、一緒に帰ったじゃん」

◎ 回想・25年前

少年時代の江田（野波）と岡本（乙葉）が、
ワイシャツにジャージ姿の凸川（西田）を引っ張って連れて来る

野波 「デコデコじゃんけん、ほいほいほい」

西田 「いでっ」

乙葉 「デコデコじゃんけん、ほいほいほい」

西田 「いでっ」

野波 「凸さんほんと弱えなあ」

西田 「へへへ、俺デコデコじゃんけん弱い」

乙葉 「凸さん、ウンコ踏んでるぞ」

野波 「凸さん、ウンコ踏んでる」

と靴を脱いで、靴底を手で拭く

野波 「汚ねえ！ 凸さん汚ねえ！ あははは（と走り出す）」

乙葉 「スメル探知、スメル探知、透明バリアー」

西田 「どこ行くんだよお江田っち、そっち鉄橋じゃん（追いかける）」

野波 「バカ、俺たち余裕で歩いて渡れるぜ、なあ岡じー」

乙葉 「小学校ん時、遅刻しそうになったら、渡ってたもんなー江田っち」

野波 「もしかして、凸やん怖えの？」

西田 「：こ、こ、怖くねえけどさあ」

乙葉 「怖えんだ！ 凸やん怖えんだあー」

野波 「：あれ？」

小学校時代の親友凸やん（古田）が現れる
不良っぽいリーゼントだがYシャツとブリーフ姿である

乙葉 「凸やん」

古田 「おう、岡じー」

野波 「うそ、凸やん？」

古田 「江田っち？」

乙葉 「凸やんだよ！」

野波 「なんだよ凸やん、ずいぶんカッコいい頭してんじゃねえかよお（小突く）」

古田 「やめろよお」

乙葉 「でも凸やん、なんでいるの？」

古田 「県大会、俺、水泳部だから」

野波 「海パンは？」

古田 「…忘れた」

野波 「ブリーフで泳ぐのかよ！ (爆笑)」

西田 「だれ？」

乙葉・野波 「凸やん」

古田 「だれ？」

乙葉・野波 「凸やん」

見つめ合う西田と古田

別の場所（凸川の書齋）で凸川が小説を読んでいる

凸川 「それが私と彼の出会いだった」

野波と乙葉、西田と古田を見比べて笑い出す

乙葉 「やっぱ似てるよ凸やん、なあ」

野波 「お前、こいつに似てっから凸やんなんだぜ」

西田 「ぜんぜん似てねえじゃん、デカいし、なんか頭悪そうだし」

古田 「うん、俺、頭、悪い」

乙葉 「だけど足だけは速いんだよな」

古田 「うん、俺、足、速い」

乙葉 「やっぱ似てるよ！」

野波 「ユニフォーム交換しようぜ」

と無理やりジャージとブリーフを交換させられる西田と古田

凸川 「私は不思議な感覚にとらわれていた、

目の前で私と同じあだ名を持つ別人が、私の親友と親しげに喋っている、

私の知らない時間を彼らは共有している…

いつの間にか私は彼に、今日出会ったばかりの少年に嫉妬心を覚えていた」

古田、乙葉の腕時計に興味を示す

乙葉 「な、なんだよ…ああこれ？ すげえだろ、ゲームもできるんだぜ」

古田 「ちようだい」

乙葉 「ダメえ」

古田 「じゃあ、ちよっとやらして」

乙葉 「しょうがねえなあ」

野波 「待った待った、こっちの凸さんと競争して勝ったらこれやるよ」

西田 「え？」

野波 「先に鉄橋渡って向こう行ったほうに、これやるよ」

SE 風

乙葉 「勝手に決めんなよお」

野波 「いいじゃん、どうせパクったんだろ？」

凸川 「それは当時出たばかりの腕時計型のゲームウオッチだった、別段欲しくはなかったが、

断ったらまた『凸やん』呼ばわり…いや凸やん以下だとバカにされる…」

野波 「やんのかよ、やんねえのかよ」

凸川 「私は流れを変えたかった」

西田 「…いいよ」

凸川 「そして、その一言が私たち3人の運命までも変えてしまった」

野波 「よーいどん！」

西田と古田、鉄橋を渡り始める

野波 「次、電車通るの何時だっけ」

乙葉 「1時3分」

野波 「いま何時？」

乙葉 「…あれ？」

野波 「なんだよ」

乙葉 「動いてない」

列車が近づく音

野波、ゲームウオッチを見て

野波 「ばか、電池入ってねえじゃん！」

乙葉 「え？ これ電池入れんの!? 勝手に動くと思ってた！」

野波 「…どうすんだよ」

乙葉 「勝手に動くと思ってた」

野波 「どうすんだよ！」

乙葉 「勝手に動くと思ってたんだよ！」

野波 「おい！ 凸やん！」

思わず立ち止まる古田と西田

列車がブレーキを掛ける音

野波 「走れ！」

西田 「……」

西田、列車の進行方向に走って逃げる

野波 「なにやってんだよ凸やん、走れよ」

古田、笑顔でジャージを脱ぐ

野波 「え？」

古田、列車に向かって走る

野波 「そっちじゃねえよバカ！ 逆！ 逆！」

古田 「うああああああ！！」

西田、飛び退く

ものすごい音を上げて列車が通り過ぎる
いつの間にか消えている古田

西田 「……」

◎ スーパーヘビー・過去（週刊太陽が発売された日）

店では岡本が週刊太陽を読んでいる

岡本 「『電車が通り過ぎると彼の姿は消えていた……」

線路の上にはズタズタに引き裂かれた私のジャージが落ちていた……

まるで、本当はお前が死ぬはずだったのだと私に語りかけるように、

いつまでも風になびいていた。

彼の遺体は発見されず、警察は捜査を打ち切った……

あれから25年、私はまだ生きている……そして時々思う、

本当の私はあの日、鉄橋の上で死んだのだと……

肉体だけが醜く成長し凶々しく生き伸びている鈍い獣、それが現在の私だ……つづく』

……え、続くの!？」

江田が（トイレから）現れ

江田 「で？ どうすんだよ」

岡本 「どうすんだよ？」

江田 「こんなことされてお前、黙ってられんのか？」

岡本 「……ごめん、こんな事って？」

江田 「（イライラして）勝手に小説のネタにされて頭来ねえのかって聞いてんだよ」

岡本 「ああ、そういう意味……来る、来るね、来るけどまあ、小説だし、

凸やんも気が遣って書いてるみたいだし」

江田 「どこがだよ」

岡本 「だってほら見て、江本と岡田になってる（見せる）」

江田 「分かるっつんだよ、この町内の人間だったら俺とお前だって分かるっつんだよ」

岡本 「そう言えば回転寿司入ったら中国人の板前に『週刊誌ヨタヨ』って言われた」

江田 「……まあ、あいつは元々お前のこと『岡田さん』だと思ってるからな、で、どうする」

岡本 「どうする？」

江田 「たまには自分の頭で考えろよ、放つといたら俺ら殺人犯だぞ」

岡本 「なんで!? あれ事故じゃん、事故だよねえ！」

江田 「もちろん事故だよ、しかも 25 年前の、

だけどこれ読んだらまるで俺とお前のせいで凸やん死んだみてえだろ？」

岡本 「…まあ実際そうだけど」

江田 「事故だろ!？」

岡本 「…ごめん」

江田 「…とりあえず週刊太陽買い占めて来い」

岡本 「ええっ!？」

江田 「考えろよ、うちは客商売なんだよ信用問題なんだよ、

今すぐ本屋とコンビニと駅の売店まわって回収、それから凸やんだよ、

あいつにこれ以上くくだらねえもん書くなってお前から言っとけ」

岡本 「それは江田っちから言った方がいいよ、俺ほら説得力ないから…」

江田 「おいこらチンピラ、俺が凸やんに頭下げろってか」

岡本 「いやいや…チンピラ？」

江田 「チンピラだよ、ネオチンピラだよ、お前、俺が頭下げてるの一回でも見たことあるか？

俺のタバコの不始末でお前ん家ちが全焼した時、お前やお前の親に、俺、頭下げたか？

あ？」

岡本 「1ミリも下げてない」

江田 「そうだろ？ 俺が頭下げるなんて、俺と凸やんの間じゃありえないんだよ」

岡本 「…分かってる、分かってるけど」

江田 「そこは考えるな、いいか？ 俺の代わりにお前が頭下げる、

それが俺とお前の正しい関係なんだから」

と控え室に去る江田
入れ替わりに静が入って来て、現在に戻る

◎ スーパーヘビー・現在

岡本 「その足で週刊太陽を、朝までかかって300冊近く買い占めまして」

静 「…で？ 先生にはおっしゃったんですか？ もう書くなど」

岡本 「はい…メールで」

静 「メールで？」

岡本 「はい『もう小説書かないでよんべコリ、ちなみに僕は最近ウクレレにハマってまーす、超楽しいよピース』って打ちました」

静 「…ウクレレやるんですか」

岡本 「やります…やりません」

静 「…」

岡本 「なんか用件だけじゃ味気ないかなと思ったんで、僕はウソを打ちました」

静 「そもそもメールじゃだめだね、そういう用件は」

岡本 「はい、それ江田っちにも言われた（笑）、いやーなかなかタイミングが無くて、

凸やんもまだ東京から通ってたし…店に来てもノラにべったりで…」

静 「え？」

岡本 「やべ」

静 「岡本さん、先生はノラちゃん目当てで来てたのね、そうなのね？」

岡本 「……」

静 「もう喋りなさいよ、誰もいないんだから…なんで誰もいないの!？」

岡本 「ほんとだ(時計見て) あ、ホルモン部か」

静 「なに部？」

岡本 「ホルモン部、江田っちがやってる焼肉屋です、2時きっかりにみんなで行くんです每晚、

キムチうどんが美味うまいんですよ」

静 「…なんで焼肉? 大事な話してるのに」

岡本 「焼きませんよ、キムチうどんだけです、焼きませんよ」

静 「焼く焼かないの問題じゃなくて」

岡本 「焼きませんよ! 本当に、信じてください、焼かないんですって!」

静 「焼かないのがそんなに偉いの?」

岡本 「だって焼かないんだもん、なんなら電話しましょうか」

静 「結構です、一人ずつ話聞いた方が何かとやりやすいし…何の話だっけ」

岡本 「焼きませんよ」

静 「もう分かったから! そうそう、ノラちゃんと先生の話ですよ」

岡本 「ああ、いい感じでしたよ、そこに江田っちは目をつけたんです、

つまりノラを利用して凸やんを小説書けない状態に追い込もうって」

静 「そういう悪知恵は働くんだ、頭下げないくせに」

岡本 「あれは…確か明が…」

静 「また明？」

岡本 「はい、明がホルモン部で働いていた頃だから10月ですね」

◎ スーパーへビー・過去（昨年の10月）

江田が『ホルモン部』の制服を着ている明（顔は見えない）に説教している

江田 「だから焼かない客にはガム渡さなくていいんだよ！ バカ！
もったいねえだろ！（とか）」

凸川が入ってくる

凸川 「…もうおしまい？」

ノラが出て来て席へ案内する

ノラ 「あーん、凸やん先生こっちこっち」

凸川 「先生はやめてよ、えへへ、ビール」

江田 「(明に) お前もう帰っていいから」

江田、明を帰して自分はカウンターのの中へ

順子がビールを持って来る

ノラ 「先生ったら火曜日しか来ないんだもん、ノラ寂しい…」

ちよつとママあ、水割りセットまだあ？」

順子 「えあ？ ビールつつったじゃん」

凸川 「いやあ、なんでもいいの、僕なんかなんでもいいんだけど、

今日はノラちゃんの言うこと聞いちゃおうかな」

順子 「栓抜いちゃったんだよねー」

江田 「順子！ (鋭く睨む)」

順子 「(ふてくされて) ふえ〜い」

江田、カウンターのの上にキーボードを持ち出して

何やらカタカタ操作する

それに連動して店内の電光掲示板に文字が流れる

(凸川からはちょうど見えない位置)

掲示板『私もっとセンセイと一緒にいた〜い』

ノラ 「(読む) 私もっとセンセイと一緒にいた〜い」

凸川 「え？ まだ来たばかりだけど」

掲示板『毎日来てほしいのお〜』

ノラ 「毎日来てほしいのお〜」

凸川 「それは無理だなあ〜」

静 「ストップ！」

あ、遠隔操作できるんですか？」

岡本 「…わざわざ改造したんです。

30万かかりました(自慢気)」

静 「…続けてください」

以下、ノラは掲示板の文字を読む

ノラ 『あゝあ、先生がこっちにお部屋借りたら、

毎日一緒にいられるのにな』

凸川 「いやーそんな余裕は」

ノラ 『そうだ、江田さんがマンション持ってるよ、

いまは順子ママが住んでるけど、来週出ていくから大丈夫』

順子 「ちよっと!」

江田 「順子!」

順子 「勝手に決めないでよ、つーかあんたの物じゃないし」

江田 「いや、お前のもんは俺のもんみたいなどこあるじゃん」

順子 「ねえよ! 私、絶対やだからね!」

江田 「愛してるから順子、愛してるから!」

凸川 「じゃあ結婚しようか」

一同 「(声を殺して) え~~~~~」

凸川 「うち親が厳しくて、同棲は基本的にNGなんだよね、結婚したら一緒にいられるけど、だめかなあ」

ノラ 「…(困って) オーナー」

江田 「……」

江田、慌ててキーを押すと電光掲示板にニュースが流れ始める

ノラ 『『曾我ひとみさんが地元新潟で涙の訴え…』』

江田 「間違えた!」

凸川 「江田くん」

江田 「あ、はい」

凸川、江田に歩み寄り両手で握手

凸川 「僕、彼女が出来たよ、若くて可愛くて、タバコ吸わない彼女が出来たよ」

江田 「よかったじゃん」

岡本 「まあ色々問題はあったけど、凸さんはノラと半同棲状態になったし、
ほぼ毎晩ここで飲んでるし、これでもう小説は書けないだろうって、
江田っちも安心してたんですけど」

◎ スーパーヘビー・過去

江田 「ぜんぜん書いてるじゃねえかよ！」

岡本 「うそお」

江田 「見ろよ、好評連載中だよ、絶好調につき2ページ増えてるよクソ！ いつ書いてんだよ！」

(ノラに) お前ちゃんとお見張ってるのかよ」

ノラ 「す、すいません」

江田 「すいませんじゃねえよ、一日じゅうチンコ握って離すなつただろ！
…なにしてんだよ」

江田が週刊太陽を叩きつける

順子、週刊太陽を熟読している

順子 「先週あんたが歌舞伎町でヤクザに監禁されたところで終わったじゃん、

続きが気になってたんだよね」

江田 「毎週読んでんだ」

順子 「うん、毎週楽しみに読んでるよー」

江田 「俺じゃねえ江本だっ！」

江田、雑誌を取り上げ、頭突き

順子 「ぎゃあ！」

江田 「回収！ とにかく回収しろ！

それから凸やんを毎晩ここ連れて来てペロペロに酔わせる！

その後はノラがSEX！ ひたすらSEX！ もーね、けん玉のようなSEX！

けん玉SEX！ …けん玉SEX？ けん玉SEX！」

順子 「普通に頭下げた方が手っ取り早いと思うんだけど」

江田 「なんなら順子もけん玉SEX！」

順子 「やだよ！」

岡本 「なんで知ってんのかな」

江田 「なにが」

岡本 「江田っちかヤクザに監禁されたこと」

江田 「……」

順子 「…え、本当にされたの？」

江田 「…うん」

岡本 「新宿でナンバーワンホストに間違えられて、中国人に拉致されてな」

江田 「言うなあ！ そのことは言うなあ！」

江田、泣きながら順子に抱きつく

順子 「泣かないでよ」

江田 「怖かったんだからあ、本当に怖かったんだからあ、
だけど、中国人のこと嫌いになれません（号泣）」

◎ スーパーヘビー・現在

岡本 「本当なんですよ、全部とは言わないけど、

この本に書いてある事だいたい実話なんですよ、変でしょう、
だって俺ら、中学のあの鉄橋の事故から一回も凸やんと喋ってないし、
高校からは会ってもいないんですよ」

静

岡本 「あんた担当だったんでしょ？ てことはさ、

凸やんがどうやってこれ書いたか知ってるんじゃないですか？」

静

岡本 「あれ？ 泣いてる？」

静 「…泣いてばせん（号泣）」

岡本 「うわ泣いてる、なんで泣いてんだよ」

静 「…若くて…可愛い彼女が出来たって…先生そうおっしゃったんですば？」

岡本 「ああ…おっしゃった、おっしゃりましたよ、あとタバコ吸わないって」

静 「うばあ！」

岡本 「なんだよ、泣いてちゃ分かんないスよ、静さん、俺どうすりゃいいのよ」

静 「（立ち直り）あんたに出来る事なんかない」

岡本 「……」

静 「あんたみたいな…口の軽い、口から生まれたようなバカに…誰が喋るもんか」

岡本 「だいたい分かるけどね」

静 「え？」

岡本 「凸やんと付き合ってたんだ」

静 「……」

岡本 「……」

静 「…はい」

エレベーターが開く

江田と順子とノラがガムをクチャクチャ噛みながら入ってくる

3人 「マジでえ!？」

静 「ウソ、ウソです、ウソウソウソ!」

3人 「クチャクチャクチャクチャ」

岡本 「あ! 江田っち焼いたんだあ、ずりいなあ!」

江田、岡本にガムを渡す

4人、静を囲んで執拗にガムをクチャクチャ噛み続ける

静 「…分かりました、話します、話しますからクチャクチャするのをやめて」

江田 「どれ、聞こうか」

静 「…その前に、喉乾いたのでビールを」

江田 「順子！」

順子、ビールを用意

静、ビールを取り、一気飲み

静 「出会ったのは2年前の夏でした」

岡本 「ちょうど明が自衛隊やめて帰って来た頃だ」

静 「明かんけーない！ ……当時、私は週刊太陽でグラビア担当の見習として働いていました、そこへ持ち込みでやって来たのが凸川先生です」

別の場所に浮かびヒがる凸川

凸川 「(咳をしながら)あの…小説書いたんだけど…

どこ持っていいかわかんなくて…(笑)」

静 「それが出会いました。通常、持ち込みの原稿をその場で読むような事はありません。

預かって担当者の机にメモを付けて置くだけ。…でも私は彼を引き留めました、

何故だ分からないけど…ものすごく暇だったというのもあるけど、

それ以上に彼の存在が気になったのです(凸川に)あなた、お名前は？」

凸川 「で、凸川」

静

「なんて面白い名前、私は改めて彼を見ました。穏やかで、それでいて神秘的で、控え目なのに強い眼差し、少年っぽいナイーブさと大人の色気を併せ持つ、まるでフランス映画に出て来る絵描きを思わせる…いいえ、明治時代の文学青年を思わせる…いいえ」

凸川

「……」

岡本 「なんかちよつと困ってるぞ」

静

「そう！ 『太陽を盗んだ男』のジュリーみたいって思ったの」

凸川

「(*太陽を盗んだ男のセリフ)」

静

「ジュリー！」

凸川

「(*太陽を盗んだ男のセリフ)」

静

「ジュリー！」

凸川

「(*太陽を盗んだ男のセリフ)」

静

「私は彼を待たせて原稿を読みました、それは『鈍獣』の原型とも言える作品でした、面白い、これは当たる、私は確信しました。

グラビア担当から文芸部に異動する絶好のチャンスだと思ったのも事実です
…ていうかそれが一番です、グラビアやめたい！ 文芸部に行きたい！
ニップレスとかムダ毛チェックの無い国へ行きたい！

その思いが、なんかもっさい中年男をジュリーに変えてしまったのです」

凸川

「(*太陽を盗んだ男のセリフ)」

静

「もおいしい！ 私は編集長を1年かけて口説き落とし、無名の新人である彼の連載をスタートさせ、首尾良く担当の座に納まったのです、さて前置きが長くなりましたが…」

一同

「えー？」

静 「なによ、今まであんたらのヨタ話に付き合っただけだから、ちよつとぐらい聞きなさいよ！」

◎ 東京、凸川の仕事場・過去

静がインターホン越しに声を掛ける

静

「ごめんくださいーい、週刊太陽文芸部の静です」

凸川

「開いてますよー」

静

「すみません遅くなりましたー（と開ける）」

凸川

「また飲んでますね」

静

「…すみません、受賞パーティの帰りなんです、

その代わりと言っては何ですが新宿に寄って江田のこと調べて来ました」

江田

「おい！」

静

「（江田に）すみません、私が調べてました（土下座）」

江田 「…おめえかよお」

順子 「信じらんない、男のためなら何でもすんのかよ」

静 「担当だから、担当だからです」

凸川 「どうでした？」

静 「(手帳見て) はい、ヤクザに監禁された時は、田舎の両親に電話して、

結局はお金で解決したみたいです、その後は裏ビデオの売買に手を出して摘発されたり、地元帰るまでに3回捕まっていますがいずれも不起訴です、またお金使ったか、

警察に知り合いでもいるのか…あ、岡本の方はアルバイトの子使って調べてます」

岡本 「なんで俺はバイトなんだよ！」

凸川 「次は岡田がバイクで事故っちゃう話にしようと思うんだけど」

静 「すごくいいと思います」

岡本 「ぜんぜん良くねえ！」

静 「あ、編集長から伝言で、

もし岡田のキャラクターが膨らまないようだったら殺しちゃっても…」

岡本 「てめえこつち来い！」

凸川 「考えておきます、あ、これ出来てるところまで、読んでみて」

B G M
I N

静 「小説家の書いた生原稿を一番に読めるなんて、私は幸せの絶頂にいました。

しかし、ほんの少し罪悪感を感じていたのも事実です」

岡本 「ほんの少しだあ!? 江田っち、ほんの少しだってよお！」

江田 「岡じー、ちよっとうるさい」

凸川 「どうですか？」

静 「すごくいい、すごくいいです、でも大丈夫ですか？」

凸川 「なにが？」

静 「地元の方、江田さんとか岡本さんとか、怒ってませんか？」

凸川 「……そうかなあ、喜んでると思うけど」

静 「……」

凸川 「まあ、そう思わないとやってらんないよね（爽やかに笑う）」

静 「その屈託のない笑顔をみて私は確信しました、この人は永遠の少年なんだわ……

かつての天才達がそうだったように、少年特有の茶目っ気とユーモアに溢れている、

それともただ鈍感で無神経な男、どっちにしろ、私は編集者というよりも母として、

少年の母として彼に接しなければ……（突然立ち上がり）凸川先生!!」

凸川 「な、なんすか？」

静 「小説のためとはいえ、他人のプライバシーを利用するなんて……」

凸川 「……」

静 「……すごいスリリング」

と凸川に抱きつく静

凸川 「し、静さん」

静 「…苗字はいや、名前で、下の名前で呼んで」

凸川 「…覚えてないわ」

静 「苗字でいいです」

凸川 「静」

静 「先生」

凸川 「静」

静 「先生」

凸川 「静」

ドアをドンドン叩く音

静 「だ、誰!？」

凸川 「あ、大丈夫、親だから」

静 「…ええ？ 親って、先生の？」

凸川 「いや、カミさんの両親」

静 「…はあ!？」

凸川 「二世帯同居なんだけど…なんか厳しいんだよね」

ノラ 「…あの人、結婚してたの？」

順子 「そりゃあ同棲NGだわ」

凸川 「どうしたの？ 何か問題でも？」

静 「……」

義母(声) 「隆二さん！ サンドイッチ持って来たから開けてえ！」

義父(声) 「自転車のチェーン外れてるでえ、隆二くん！」

義母(声) 「隆二さーん！」

義父(声) 「隆二くーん！」

凸川 「はあい、今開けます」

静 「開けちゃダメっ！」

林真須美みたいな義母(古田)と林健治みたいな義父(生瀬)が立っている

義母 「隆二さん…」

義父 「隆二くん…」

凸川 「うわ、うまそー(とサンドイッチ食べる)」

◎ スーパーヘビー・現在

静

「…その瞬間、全てが終わったの、まだ文芸部の名刺も出来る前でした。

私と先生の関係は公になり、担当も外されてしまった、それだけじゃない！

あいつは私との関係を、作家と編集者の不倫を題材にした小説を書いて、
よりによってライバル誌の週刊日の丸に売り込んだの」

凸川 「咳をしながら）あの…小説書いたんだけど…

どこ持っていいかわかんなくて…（笑）」

静

「結局私は、文芸部どころか編集部からも追い出されました、だけど諦めきれない、
なんとか文芸部に戻りたい、そして見返したい一心で、

今は…ある月刊誌で凸川先生の失踪事件に関するルポを書いています」

江田

「なんていう雑誌？」

静

「え？」

江田

「なんていう雑誌で書いてんの？」

静

「…それはまあ…いいじゃないスカ」

江田

「言っちゃおうよ静さん、ここまで来たら全部言っちゃおうよ」

静

「…しゅ、趣味の雑誌で」

江田

「趣味の雑誌」

静

「…はい、『月刊へらぶな』という」

江田 「月刊へらぶな」

静 「…はい、月刊へらぶなで、ウロコちゃんの入れ食いコラムという

半ページのコーナーをやらせてもらってまして、その中で時々書いてます（泣）」

江田 「その…『月刊へらぶな』はさあ、何十万人が読んでいるわけ？」

静 「…8千ちょい」

江田 「そうか…よく話してくれたね、月刊へらぶなの静さん」

こらえきれずに笑い出す江田
つられて順子やノラも笑い出す

静 「…そんなにおかしいですか？」

江田 「いや、おかしくねえ、立派な仕事だよ、月刊へらぶな（爆笑）」

静 「あは…あは…あーはーはーん（泣き笑い）」

順子 「見たことないもん、月刊へらぶななんて」

ノラ 「へらぶなって何ですか？」

江田 「誰が読むんだよ、誰が読んでんだよ」

岡本 「はい（手を挙げる）」

順子 「え？」

岡本 「毎月読んでます」

江田 「…あそう」

岡本 「定期購読してます、え、ウロコちゃん？」

静 「…あ、はい」

岡本 「驚きだあ…いや感激だあ！ (握手) ウロコちゃん、江田っち、ウロコちゃん」

静 「ご存じなんですか？」

岡本 「ご存じも何も月刊へらぶなのウロコちゃんつつたら、

今ヘラ界のアイドルじゃないスかあ！

先月も霞ヶ浦で38センチの大物釣り上げたンスよね、写真見ましたよお」

静 「…なんか嬉しい」

岡本 「うわー、ウロコちゃん、ウロコちゃんスかあ (携帯で写真撮る)」

静 「はい、ウロコです」

岡本 「ウロコちゃんだよ」

静 「目からウロコ」

岡本 「ウロコちゃんだあ…そっかあーウロコちゃんかあ…へえ…あそお…いやー…

(江田に) どうぞ」

江田 「静さん、いやウロコちゃん、どうやら俺たちアンタのこと誤解してたみてえだな」

静 「…江田さん」

江田 「最初はなんか大学出の、ちょっと近寄りがたい、

男顔負けのキャリアアーマンだと思ってた、だけど今の話聞いて分かった、

あんた俺たちと同類じゃねえか、思いつ切りこっち側の人間じゃねえか、
目先の欲にかられて社会からはみ出した人生の敗北者じゃねえか」

静 「そ、そうなんですか？」

順子 「アタイも誤解してた」

静 「あ、あなたも？」

順子 「最初はなんか都会的な、代官山っぽい、女が憧れるタイプの女だと思ってたわ、

でも全然ちがう、女っていうよりメス？ アタシたちと同じ、

オス無しでは生きていけないメス犬だったのね、見直したよ」

静 「……順子さん」

ノラ 「私も誤解してました」

静 「いい！ 誤解してて、ずっと誤解してていいから」

江田 「よし、1 曲歌おう！」

静 「なんで？」

江田 「あんたが俺たちと同じレベルに降りてきてくれた、祝いの歌だよ、

去年インディーズで出した俺の持ち歌、聴いてくれ」

静 「歌も出してるんですか？」

岡本 「やべえよやべえよ、江田っちの歌聴いたらもう正気じゃいらねえよウロコちゃん！」

江田 「：俺の事を分かってほしいっていう歌だ、聴いて下さい、ゴートウヘル横浜」

MUSIC IN

カラオケが流れる

以下・歌詞

「ゴートウヘル横浜」

働きたくない、 (ハイハイハイハイ)

横になりたい (ハイハイハイハイ)

金が欲しい、 (ハイハイハイハイ)

俺は夜の男

(男だ、男だ、江田さん、江田さん)

楽してモテたい、

俺は夜の男

自分が大好きさ、

死ぬほど俺が大好きさ

オーイエーイ!

(エル・オー・ヴィー・イー、ラヴリー江田さん)

俺は俺、
俺が一番

お前なんか 俺に抱かれて
無限地獄に 堕ちるがいいさ

ゴートウヘル (ウウーッ)

ゴートウヘル (ウウーッ)

ゴートウヘル

横浜

(セリフ) 「なあ、順子、それでも俺が好きか？ 順子お…」

よこはまああああ

ものすごく盛り上がる

順子、感極まって江田に抱きつく

順子 「あんたあ…」

江田 「どうだった？」

静 「…俺がいっぱい出て来ました」

江田 「俺の歌だからな」

岡本 「いやー盛り上がったあ、これで喋りやすくなったよな」

江田 「何しろ…月刊へらぶなだもん(笑)」

ノラ 「へらぶナって何ですか？ へらぶナって何ですか？」

静 「…理由はどうであれ、嬉しいです」

順子 「あんた、テープ終わってる」

静 「すいません」

順子 「回すがいいさ」

テープを入れ替えB面にする静

江田 「それに、考えようによっちゃあんたも凸やんの被害者なんだもん」

岡本 「もう何でも聞いちゃってくださいよお」

静 「凸川先生のこと、殺したでしょう」

岡本 「殺しました」

一同 「……」

岡本 「殺してません」

M
U
S
I
C

I
N

暗
転

〈15
分間の休憩〉

第二幕

◎ 駅前のタクシー乗り場

冒頭のキオスクに3人のおばちゃんがいる
週刊太陽の順子のグラビアを見て言いたい事を言っている
客の気配を感じて雑誌を隠す

静 「(舌打ち)」

古田 「なに、またあんた？」

静 「しょうがないでしょ、タバコ買おうと思って歩いてたらここ来ちゃったんです」

古田 「もう吸っちゃったの？」

静 「ていうか、全然歩ける距離じゃないですか」

池田 「だーかーらー、おばちゃんの足じゃ無理だって言ったのよ」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢さんがね…」

静 「(遮って) マイルドセブンライトください」

3人 「270円です」

やはりぶつかりながらタバコを出す

ため息をつきながらタバコに火をつける静

静 「あーあ（しゃがみ込む）」

古田 「どうしたのよ、ため息なんかついて」

生瀬 「ん？ なになに？」

古田 「このお嬢さんがね、集団レイプされたんですって（とか）」

生瀬 「んまー」

静 「ねえおばちゃん」

3人 「ん？ なになに？」

静 「好きな人いる？」

3人 「!!」

3人、急に色めき立って相談し始める

生瀬 「それはあれ？ …ナウ、進行形？」

静 「ナウ、進行形、今、いるの？」

生瀬 「……いるわよお」

古田 「やだ、生瀬さんたらお盛んなんだからもーギシシシ」

池田 「誰なのよ誰なのよべべべべ」

古田 「発表しまーす、毎朝新聞届けに来る福祉大学の学生さんでーす」

生瀬 「わーわーわー（耳塞いで）顔から火が出る、顔から火が出るう」

静 「……じゃ、お幸せに」

生瀬 「待たんかいコラア！」

静 「……」

生瀬 「あんたくさ、おばちゃんの身体に火ばつけよってくさ、そりやなかろうもん」

古田 「ほーら九州弁よ、生瀬さんの九州弁出ちゃったわよ」

生瀬 「おいどんと古田どんはまだしも、

池田どんの好いちよる人に捧げるシャンソンば 聴きんしゃい！」

古田 「来たーこれ、池田さんの十八番は『愛の讃歌』なのよ、さあ、歌って！」

池田 「♪あ〜〜な……」

静 「私の好きな人はもうこの世にいないんです」

古田、池田を黙らせる

池田 「……」

静 「死んじゃった、死んじゃったみたいなんです、でも不思議、ぜんぜん哀しくないの、

すごい冷静なんです、なんでか知らないけど、

さつきから頭の中でオレンジレンジの歌がずっと鳴ってるの

♪あつあー、どうぞ、ろこもーしよんってグルグル回ってるの、好きじゃないのに、

オレンジレンジなんかぜんぜん好きじゃないんです！ ねえ、池田さん、

私の代わりにオレンジレンジ歌ってください、でないと集中できない、オレンジレンジが邪魔して好きな人に集中出来ないよおっ（泣く）

古田 「…歌ってあげなさいよ」

池田 「…いや、知らないから」

生瀬 「いいから」

池田 「え？ なにレンズ？」

古田 「レンジよ、オレンジレンジだって」

静 「…池田さん」

「…♪住み慣れたオレンジに、花の香りを添えて…」

池田 「そんなんじゃない!!」

キオスクに蹴りをいれる静

BGM IN

「わーっ」とか言いながらあつという間に上手にハケるキオスク

◎ ホストクラブ 「スーパーヘビー」 ・ 現在

静、我に返って順子の向かいに座り、テープを回す

静 「さあ、話してください」

順子 「……」

静 「みなさん、最初に凸川先生の殺害を提案したのはあなただって言ってるけど。私にはどうしてもそうは思えないの」

順子 「……」

静 「江田さんのこと庇ってるんでしょ？」

順子 「(唐突に) 私、江田しか男知らないんです」

静 「…あ、はい」

順子 「家が近所だったので小さい頃から知ってるんです、会うたびに

『順子ちゃんは俺の愛人になるんだよ』って言われて、そうなんだーって思ってた」

静 「お嫁さんじゃなくて愛人なのね」

順子 「あ、はい、私は愛人顔だって」

静 「幾つの中から？」

順子 「私が8歳だから江田は24かな？」

静 「…最低ね」

順子 「実際そういう関係になったのは、もつと後、5年後くらい？」

静 「最低……」

順子 「最初は自分だけ大人になったみたいで気分良かったの、

でも……だんだんそうでもないなって、やっぱ話とか合わないし、

友達に江田を紹介してもみんな売り飛ばされるんじゃないかってビビっちゃって」

静 「別れようとは思わなかったの？」

順子 「(首を振る)うまいんです、そういうところが江田なんだけど、あいつ他にも愛人がいて、

その愛人同士ノライバル心……競争意識っていうの？

なんかうまいこと刺激するんですよ、これ見て下さい」

とカードを出す順子

静 「何これ」

順子 「江田ポイントカード」

静 「はあ」

順子 「江田に尽くせば尽くすほどポイントが増えていくの、1回寝ると1ポイント、

ご飯作ると1ポイントって」

静 「……いっぱいになったら？」

順子 「CD1枚買ってもらえるんです」

静 「……へえ」

順子 「で、10枚たまると自分のお店持たせてくれるんです」

静 「あら…じゃあ、あなた」

順子 「はい、もうぶっちぎりのトップで」

静 「…ねえ順子さん」

順子 「へい」

静 「やっぱりあなた言い出しっぺじゃないわね」

順子 「……」

静 「真っ直ぐなもの、あなたどうしようもない位真っ直ぐなもの」

順子 「そうですね？ 私、相当悪い女ですけど」

静 「良い悪いじゃなくて、真っ直ぐなのよ…大丈夫、本当のこと話してくればいいの、
今ここには私と貴方しかないんだから…」

岡本は花だの緑だのをまとってグリーンに化けている

ノラは赤ベコをかぶって、巧みに店のオブジェに成り済ましている

江田は上手側の自分の写真パネルから顔を出している

岡本 「……（静と目が合って）やべっ」

静 「奥で待ってて下さい！ お一人ずつお呼びしますから！」

江田 「だって…」
静 「なんですか!？」

3人ぶつぶつ言いながら控え室へ戻っていく

順子 「例の小説が単行本になるって聞いて、江田が凸やんを店に呼び出したんです、あれは確か…あれ? いつだっけ？」

静 「年末ぐらい？」

順子 「そんな前じゃない、えっと…ダメだ、全然思い出せない」

静 「明は? 明なにしてた？」

順子 「明? あ、明、ティッシュ配ってた、江田が100円ショップ出したんですよ、申年だからって2人で猿の恰好してティッシュ配ってた…てことは、お正月だ、やった、思い出したあ!」

静 「…ほんとかよ」

店内BGM IN

◎ スーパーへビー・過去（正月）

可愛らしい猿の着ぐるみを着た江田が、
超リアルなゴリラの着ぐるみを着た明に説教している

江田 「怖いよ！ 根本的なズレが生じてると思うんだよ俺とお前の間で…

なんでそっち行っちゃうかなあっていうさ、デスコミュニケーションだよなあ」

エレベーター開き凸川が和服で入って来る

凸川 「あけおめ、ことよろ」

順子 「ハイハイ、ことよろ」

江田 「（舌打ち） 帰れ明、もう二度と俺の前に現れるな」

凸川 「え？ おしまい？」

江田 「いや、今日休みだから」

凸川 「あそお、いやー参ったよ、初詣行っておみくじ引いたら大凶だよ、3年連続大凶だよ」

江田 「ビールでいい？」

凸川 「ビール？ うん、ビールでいいわ…：そういえばあれ、本になるらしいね」

江田 「……」

凸川 「小説、俺とか江田くんが出て来る、みんながあんまり言うから読んでみたんだけど、あれ結構ハマるね」

江田 「……あそお」

凸川 「うん」

江田 「……あのさ凸やん、話っていうのはその事なんだけどさ」

凸川 「うん」

江田 「印税ってあるじゃん、本の」

凸川 「うん」

江田 「俺とか、それ貰う権利があると思うんだよ、印税」

凸川 「うん」

江田 「分かる？」

凸川 「うん」

江田 「全部とは言わないけどほら、ネタ提供してるわけだし、

一方的に書かれて黙ってるわけにはいかねえし、分かるよなあ、凸やん、俺ナメられんの大っ嫌いなんだよ」

凸川 「うん」

江田 「(苛立って) 本当に分かってんのかよ」

凸川 「分かるよ…江田くんお金に困ってんだろ？」

江田 「……(啞然)」

凸川 「ノラに聞いたよ、商売うまく行ってないって、

ラーメン屋とゲーム喫茶、客入らなくて潰れたんだって？」

江田 「(怒りを堪えて) …だからなんだよ」

凸川 「だから貰えるもんは貰った方がいいと思うんだよ、

江田君にはその権利があると思う、言った方がいいよ、小説書いてるヤツに」

江田 「だから言ってるんだよ！ 今！ お前に！」

凸川 「…おれ？」

江田 「お前だよ」

凸川 「…俺かあ…まあ俺もこんな感じだけどき、江田くんには世話になってるし、

できるだけ力になるよ」

江田 「……」

凸川 「大丈夫だよ、何とかなるって」

順子 「その夜、私は呼び出されてホテルで待っていました、江田は荒れました」

◎ ホテルの一室

ベッドに座っている順子、江田入ってくるなり

江田 「：あいつ頭おかしいぞ！」

順子 「すっとぼけてるだけじゃないの？」

江田 「だったら尚更タチ悪いだろ、人の弱みにつけこみやがって、何が目的なんだよ！」

順子 「!？」

江田 「そりゃ昔ちよっとイジめたけど：いや、ちよっとじゃねえけど、でも何で今なんだよ、

お互い体力も落ちて中年の域に達してんだから：

体臭とかもう誤魔化しようがないんだから：なんだよ」

順子、江田の髪のをかき分ける

江田 「え？ え？ え？ なになに？」

順子 「(放心)：なんでもない」

江田 「なんでもなくねえだろ！」

と鏡の前に行って自分で確認する
わりと目立つ所にハゲが出来ている

江田 「：なんだよこれ：なんでここだけツルツルしてんだよ！ おい順子！ 髪のはは？
俺の、ここの部分の髪のはは!？」

順子 「…あんだ」

江田 「…順子ちゃん…俺ハゲちゃったあ…凸やんのせいでハゲちゃったあ」

江田、順子にしがみつく

順子 「大丈夫、すぐ生えてくるわよ、大丈夫、泣かないでよ」

江田 「順子！ …いいか順子…今から言う事は誰にも言うな、ノラも明も、もちろん岡じーにも内緒だ、俺とお前だけだぞ」

順子 「…はい」

江田 「俺とお前で…（深呼吸）」

順子 「…ああっ！（崩れ落ちそうになる）」

江田 「なんだよ」

順子 「想像しちゃったの、あんだと2人で凸やん殺すところ想像しちゃったの」

江田 「……」

順子 「ダメ、ムリムリ、今まで何でも言うこと聞いてきたけどそれは無理」

江田 「……」

江田、すっかり魂が抜けた顔になる

順子 「どうしたの？　なんか顔がメールの絵文字みたいになってるよ」

江田 「：順子ちゃんが怖いこと言うからだよ」

順子 「だって今…え？　殺すって言うおうとしたでしょ？　したよね？」

江田 「してねえよ、よく見ろ、俺、いま猿だぜ、そんな大それたこと言うなら、
せめてこれ脱いでからだだよ、ううわ怖えっ、女って怖えっ」

順子 「じゃあ何よ！　なんて言うおうとしたのよ！」

江田 「僕はただあ…ちよっと懲らしめようってえ…ちよっとだけ痛くしようってえ（震える）」

順子 「ごめんフライング、順子フライング、フライングV！　ああっ！」

江田、順子をベッドに押し倒す

江田 「ひでえ女だよ、俺の親友殺すところ想像して興奮するなんてさ」

順子 「いや、そんなこと言わないで、フライングV」

江田 「何考えてんだよ…おまえ変態だよ…変態…変態だよ…」

順子 「ああん、だめ、そんなの、ずるい、あんた、ずるい、もつと、あんた、もつとお！
あーうす、あーうす、あすう…（静に）あの、私、DMなんです」

静 「聞いてないです」

順子 「すみません…とりあえず一回戦終えてですね、

初詣行ってお正月だからお餅とか買って、本屋に寄ったんです。

江田は犯罪もののコーナーから動こうとしませんでした、それで、
やっぱりこの人やる気だなって思ったんです、あ、これがその時のレシートです」

と、静にレシートを渡す

静 「凶悪殺人ファイル、実話ナツクルズ、完全毒殺マニュアル、クッキングパパ5巻、

戦後犯罪史、本庄保険金殺人事件、週刊太陽、クッキングパパ10巻…」

順子 「お雑煮作ろうと思って」

静 「和歌山カレー事件の真相、禁煙セラピー、クッキングパパ〇巻、

ロシアの殺人鬼チカチーロ、円形脱毛症は気力で治す、黒酢で100まで生きる、
バカドリル、世界の中心で愛を叫ぶ…もうなんだかよくわかりません」

順子 「それらを一晚かけて読み漁って、江田はこう言いました」

江田 「…やっぱり毒殺だ」

順子 「毒殺？」

江田 「ああ、他の方法だと指紋だの何だの証拠が残るだろう、

でも毒なら証拠は死体の中だし、ウチは飲食業だし」

順子 「逆に怪しまれるんじゃない？」

江田 「バカ、堂々としてりゃ大丈夫だよ、でも堂々とし過ぎてもダメだ、

店で記者会見開いたりな、それから…」

順子

「（静に）私はメモを取りながら江田の言葉に耳を傾けました、

そして、ふと思いました、こんなに真剣な江田を見るのは初めてだ、

しかもその真剣な眼差しは私ひとりに注がれている、

江田を独り占めしているという充実感を私は感じていたのです、

江田は私の心を見抜いていました」

江田

「なんでニヤニヤしてんだよ」

順子

「え？ してないよ」

江田

「やっぱ変態だよ」

順子

「あーうす…というわけで、いつにも増して燃えてしまいました」

静

「はしょってください」

順子

「それで殺鼠剤（きつそざい）というの？ 本に載ってた猫イラズみたいな薬、

日本だと足がつくのでインターネットで海外から購入したんです」

◎ スーパーヘビー・過去

江田が殺鼠剤をカウンターに置く

江田

「（順子に）しつこいようだけど、これはノラや明、もちろん岡じーには内緒だからな、

俺とお前だけでやるんだ」

順子 「『俺とお前だけ』、あの頃、江田は何かとその言葉を口にしました…でもそれは、

私をいいように操る常套句だったんです」

エレベーター開き岡本が入って来るなり

岡本 「いよおー！ 順子ちゃん、凸やん殺すんだってなあ」

順子 「(江田に) あんた!？」

岡本 「思い切ったなあ、俺にやあ無理だあ、遠くで見てるから」

順子 「喋ったの?」

江田 「ああ? ああ」

ノラもやってくる

ノラ 「聞きましたよママあ、毒盛るんですって? 頑張って盛って下さいね、

これ差し入れ、チョコラBB」

順子 「:帰る」

江田 「待てよ順子」

順子 「話違うじゃない、2人でやるって言ったじゃない」

江田 「バカ、何かあった時に2人じゃ何かと心配だろ？」

順子 「こいつらが頼りになると思ってたの？」

岡本 「うわ、へソ臭え！へソがウナギ臭え！ウナギ食べちゃったんです、先輩にごちそうになっちゃったんです」

ノラ 「嗅いでいいですかあ？」

江田 「(キレ気味で) 分かんねえじゃん、やってみなきやわかんねえじゃん」

順子 「勝手にやれば？」

江田 「…考えたんだよ順子、いくら俺だつて好きな女にそこまでさせられねえって、おまえの手を汚すわけにはいかないよ」

順子 「…あんた」

古田 「いざとなったら最後はあの2人にやらせる…」

お前はこの薬をひたすら酒に混ぜて飲ませればいいんだよ」

順子 「…やっぱ私じゃん！」

エレベーター開き凸川が入って来る

凸川 「おしまい？」

ものすごい緊張が走る

凸川 「あれ？ もうおしまい？」

江田 「いや…一杯ぐらい飲んでけば？ なあ」

岡本 「お、お、おお、で、で、で、凸やん、お、おでと、の、の、飲み…」

江田 「帰れ、お前、仕事だよな」

岡本 「い、いや、や、や、や、休み…」

江田 「帰れ！ そんなロボットみたいなヤツに飲ませる酒ねえよ、頼むから今日は帰ってくれ」

岡本 「んま、んま、んま、んまた来るわ」

岡本出て行く

凸川 「なに、なんかあったの」

江田 「別に、水割りでもいい？」

凸川 「うん、水割りでもいい」

江田 「順子（と顔で合図）」

順子 「（何度も頷く）水割り作りまーす」

ノラ 「わたし手伝いまーす（とカウンターへ）」

凸川 「どうしたの、なんかみんな優しいじゃない、気持ち悪いなあ」

江田 「別に、普通だよなあ」

凸川 「そう言えば、こないだの話ずっと考えてたんだけど、讃岐うどんの店とかどうかなあ」

江田 「え？」

順子 「…ちよっと」

ノラ、殺鼠剤を容赦なくグラスに入れてる

凸川 「東京じゃ讃岐うどんがブームなんだけど、この辺まだないでしょ？」

絶対当たると思うんだよ、ラーメン屋とか回転寿司よりコストも安くすむし、
すぐ始められると思うんだよね」

江田 「凸やん」

凸川 「んん？」

江田 「それ、ずっと考えてたの？」

凸川 「うん、ずっと考えてた」

ノラ、水割作り終えて

ノラ 「(順子に) 持ってって下さい」

順子 「…はい」

江田 「…おまえ、いいやつだな」

凸川 「よせやい」

江田 「…讚岐うどんかあ…やってみようかなあ」

順子、水割りを凸川の前へ運ぶ

凸川、グラスに手を持っていく

一同、目をそらす

凸川 「あ、それからさ」

江田 「ん？ なになに？」

凸川 「これ、順子ママに」

と、ハンドクリームを出す

順子 「私に？」

凸川 「うん、ノラから聞いたんだけどアカギレひどいんでしょ？

水仕事終わったあとに塗るといいんだって」

順子 「…ありがと（泣）」

凸川 「それから江田くんにはこれ」

江田 「（涙）なんだよ…育毛剤じゃん（号泣）」

凸川 「うん中国の、俺も30の時ストレスで髪の毛ごっそり抜けたから分かるんだよ、

つらいと思うけど絶対治るから…あ、それから」

江田 「もおいしい！ と、とりあえずグーツと喋ってくれ」

凸川 「…ああ」

凸川、グラスを持って飲みかける

凸川 「江田くん、俺、嬉しいよ、学生時代の友達とこうやって酒を酌み交わすなんてさ…

生きていればこそだよ…思えば、俺…」

江田 「かんばーい！」

凸川、やっとグラスの酒を飲む（なぜかイッキ飲み）

江田 「…凸やん」

凸川 「なに？」

江田 「…なんでイッキした？」

凸川 「…ああ、いやあ、なんかテンション上がって」

江田 「……そう」

凸川 「……うん」

ものすごい長い沈黙。凸川、微動だにしない

凸川 「……帰るわ」

江田 「ええっ!？」

凸川 「だめ？」

江田 「だ、だめじゃないけど、もう1杯ぐらい飲んだら？ なあ順子」

順子 「……(放心)」

江田 「ノラ」

凸川 「濃い目でね」

江田 「こ、濃い目だって」

ノラ 「……あ、はーい、濃い目入りまーす(とカウンターへ)」

◎ スーパーヘビー・現在

順子 「結局、殺鼠剤入りの水割りを都合7杯飲んだんです」

静 「……そりゃあ死ぬわね」

順子 「死なないんです」

静 「え？」

順子 「だから死なないんです」

静 「えっ！ 死んでないの？」
順子 「さすがにそれから数日は顔出しませんでしたけど……」

◎ スーパーへビー・過去

江田 「おいノラ、凸やんどうだ」
ノラ 「夕べもずっと吐きまくりでした」
江田 「吐いてるか……てことは生きてんだな（と週刊太陽を手取る）」
ノラ 「はい、もう私怖くて、昨日から友達の家泊まってるんです」
江田 「まあいいよ、うん、そんな調子じゃさすがに小説も……書いてるよ！」
岡本 「うそお！」

エレベーター開き凸川が入って来る

凸川 「おしまい？」
江田 「うああ」
凸川 「もう、おしまい？」
江田 「い、いや、いらっしやい」
凸川 「参ったよお、なんか体壊しちゃって、コタツで寝たからかなあ、水割り」

岡本 「…の、飲まない方がいいんじゃないの？」

凸川 「いやー飲まなきゃやってらんないよお、身体が痛くてさあ」

江田 「…順子」

◎ スーパーヘビー・現在

順子 「それから1ヶ月、私は江田に言われるままほぼ毎日、

多い時はボトル1本分の水割りを凸やんに飲ませ続けました、

あ、ボトル1本ていうのはウイスキーじゃなくて猫イラズのボトルね」

静 「それ、本当に猫イラズ？」

順子 「はい、ネズミだったら3日で歩けなくなって1週間で死ぬくらい強いので、

おかげでここ、飲食店なのにネズミ1匹もいないんですよ」

静 「…ネズミじゃないから、先生は」

順子 「そうなんですよ静さん、人間てなかなか死なないんですよ、

それでも江田は本を読み直して色々と研究してみたんで」

◎ スーパーヘビー・過去

岡本、大きなグラスに入った黒い液体を飲んで

江田 「まずっ！」

順子 「なに、なに飲んだの」

江田 「本に書いてあったんだよ、タバコひと箱分水に漬けてニコチンだけ抽出したの、念のため、フグの内臓も入れた」

順子 「(匂い嗅いで) おえっ！」

岡本 「いやあ、俺タバコ吸わないからキツイわこれ (飲んで) まずっ！」

順子 「そんなマズいの、どうやって飲ませるのよ」

岡本 「まずっ！」

江田 「めんつゆだって言えば騙されねえかな」

順子 「そこまでバカじゃないわよ」

岡本 「まずっ！」

ノラ 「コーヒーと混ぜたら分かんないかも」

岡本 「まずっ！」

江田 「95度のウオツカあったじゃん、あれに混ぜて飲ませてみようか、なんか中国の精力剤だつてさ」

岡本 「まずっ！」

順子 「他の方法考えたほうがよくない？
ウチらが思ってる以上にあの人、頑丈だよ」

岡本 「まずっ！ うわ、まずっ…まずっ！

「まずいわあこれ…まずっ！」

江田 「そう急ぐなよ順子、弱って小説書けなくなれば殺す必要もないんだから…

(岡本に) うるせえよ！」

岡本 「…あ」

岡本、全部飲んでしまう

◎ スーパーヘビー・現在

順子 「岡本は救急車で運ばれて

生死のはざまをさまよいました…

なのに凸やんは同じものを飲んでも」

凸川 「いやー効くわあ、あの中国のクスリ、

20代の勢いが蘇ったよ」

順子 「他にも農薬とか殺虫剤とか、あと睡眠薬とか？

色々試したんだけど効果なくて、

江田のストレスはたまる一方、

髪の毛は抜ける一方でした」

静 「追い込むつもりが追い込まれたって感じね」

◎ スーパーヘビー・過去

髪の毛がマダラに抜けた江田

江田 「あーもお！ 勝手に自殺でもしてくんねえかな、小説家なんだからよお」

岡本 「…もしかして気づいたんじゃないかな」

江田 「気づいた？」

岡本 「江田っちが殺そうとしてることだよ、気づいてさ、

俺らが見てないところでトイレ行って吐いてんじゃないの？」

ノラ 「じゃあ来なきやいいのに、なんで毎晩来るの？」

岡本 「知らなねえよバカ、たまには自分の頭で考えろ！」

江田 「そおいうとこ凸やん変わってねえんだよ、そう言えば中学ん時もさ、

来ないでほしいなあと思ってる時に限ってついて来るんだよ」

岡本 「そおそおそお、家で飯食ってる時に限って遊びに来るし」

江田 「しかもなかなか帰んねえの、こっちは飯の途中だっつのにマンガ読み出してな」

岡本 「俺なんか、家族で旅行いく時もついてきちゃって大変だったもん」

江田 「あー！ 思い出したらまた腹立って来た、おい順子！

明日、店休んでハイキング行くぞ」

静 「…ハイキング？」

順子

「それが何を意味するか、薄々は分かっています…

それでも、江田と二人っきりで出かける事が嬉しかったです、

久しぶりのデート、ディズニールランドにも連れてってくれた事なのに、

ハイキングなんて、もう、想像もつかない、

私は早起きして江田の大好きなちらし寿司と豚キム子をお弁当箱に詰めて、

勝負下着を付けて出かけたのです」

◎長野県あたりの山・過去

山を登っている順子と江田

はしゃいでいる順子とは対照的に江田は目つきが鋭い

順子 「うわあ、いい眺め、来てよかったねアンタ」

江田 「ああ」

順子 「空気も美味おいしいし、そろそろお弁当にしようか」

江田 「ああ」

と、順子がレジャーシートを広げる

順子 「ねえアンタ、麓ふもとに温泉あったでしょ？ せっかくだから順子、お泊まりし

たいなあ…やん」

順子を押し倒す江田

江田 「……」

順子 「…だめだよ…誰か来たらどうすんだよう」

江田、レジャーシートをめくると、葉っぱのついた根菜を引っっこ抜く

江田 「…見つけた」

SE シャッター音

順子 「トリカブトでした…だいぶ前から江田が本やインターネットで

野生のトリカブトについて調べているのは知っていました」

江田 「何やってんだよ、お前も探せ」

順子 「怖かった、私とっても怖かった…それでも私は、

江田の機嫌を損ねてせつかくの旅行が台無しになるのがイヤだったの

(江田に) わあ、いっぱい生えてるう、ここにも、ここにも！ すごいすごいすごい！

やっぱり来てよかったあ、見て見てえ(とトリカブトを束ねて) ブーケみてえだよお」

江田 「うるせえ、黙って探せ」

順子 「…はい」

◎ スーパーヘビー・現在

静 「そのトリカブトを先生に食べさせたんですか？」

順子

「ええ…忘れもしない5月10日、

その日は凸やんを呼んでタバコや農薬が入った水割りを5、6杯飲ませたあと、キムチうどんに刻んだトリカブトを混ぜて出しました…」

静

「ちょっと待って」

順子

「……」

静

「ごめん、なんでもない続けて」

順子

「…明ですか？」

静

「一応、聞いてもいいかな」

順子

「マルチ商法にはまっていました」

静

「明だめだあー」

◎ スーパーヘビー・過去（5月10日）

凸川を囲んで飲んでいるノラと岡本
離れた場所で明に説教している江田

江田

「お前んとこの洗剤使ったら、手、火傷したよ！

水仕事で何で火傷するんだよ、分かるように説明しろ！（とか）

ノラ

「ねえ先生、うどん食べる？ キムチうどん」

凸川 「ああ、いいや、なんか調子悪いし」

ノラ 「うそー、食べると思ってた、頼んじやった、ねえママ」

順子、一心不乱にトリカブトを刻んでいる

江田 「帰っていいぞ明（凸川に）うどんだったら食えるだろ？ 凸やん」

凸川 「いやあ：最近ほんと食欲ないんだ、食べても吐いちゃうし」

岡本 「食べた方がいいって、酒ばっかりじゃ身体壊すよ」

ノラ 「ひと□だけでも食べれば？」

凸川 「（笑）なんだよ、みんなして、毒でも入ってんじやないの？」

一同 「……………あはははははははははは」

と笑うが、目は笑っていない

凸川、水割りを飲んで

凸川 「じゃ、帰るわ」

江田、凸川の腕を掴んで

江田 「食えよ、食えるよな」

凸川 「…うん」

順子がうどんを運んでくる

凸川 「わあ、美味^{うま}そうだ」

一同が見守るなか、うどんに箸を付ける凸川

そわそわ落ち着かない順子

うどんを一气にすする凸川

たまらずしゃがみ込む順子

江田 「順子…」

凸川、手を止める

岡本 「ど、どした、でこやん」

凸川 「…いや、詰まっちゃった喉に」

一瞬、緊張が緩む

江田 「凸食いするからだよ、…はははは」

凸川 「うああああっ!!」

凸川、突然もがき苦しみ出す

江田 「押さえろ！」

岡本 「(硬直) あ…あ…あ…」

凸川 「うああっ! (のたうち回る)」

江田 「押さえろよ早く! 外に聞こえるぞ！」

江田とノラ、暴れる凸川を押さえつける

遅れて岡本ものしかかる

順子 「…その時の先生の苦しみ方は今でも目に焼き付いています、

全身汗びっしょりで唇が腫れ上がってまるで別人のようでした…

私は自分の犯した罪の恐ろしさを改めて知りました…最後は身体をえび反らせて、
先生は動かなくなりました…」

江田 「おい岡本」

岡本 「……」

江田 「おめえだよ、岡じー、車を表に回せ」

岡本 「……」

江田 「鉄橋の上から川に落とすんだよ、誰にも見られんじゃねえぞ、おい聞いてんのかよ」

岡本 「…お、おれえ!？」

江田 「ノラ…」

見るとノラが馬乗りになって「死んで！ 死んで！」と言いながら

凸川の首をギュウギュウ絞めている

江田 「もういいぞノラ、ノラ！ ノラ！ ノラ！ 死んでるから！ 早くしろ！

下まで運ぶんだよ！」

岡本 「お、お、おおお」

動かなくなった凸川を運び出す岡本

江田 「いいか、ここで見た事は誰にも喋るな、つーか忘れろ！ 何も見てない、

いつも通り飲んで騒いでたんだ、分かったか！

もしバレたら、お前らのどっちかが裏切ったと思うからな！」

エレベーター閉まる

◎ スーパーヒーロー・現在

静 「…よく話してくれたわ」

順子 「……」

静 「貴方は主犯格じゃない、ただ江田の命令に従っただけなのね」

順子 「……」

静 「でも罪を犯した事に代わりはないわ、さあ警察へ行きましょう。

警察へ行って自分のした事を、今話したことそのまま話せばいいの、分かるわね」

順子 「……」

静 「立ちなさい、あなたや江田のせいで凸川隆二は死んだの」

ノラ 「死んでません」

静 「え？」

ノラ 「ここからは私か話します、岡本さんが凸やん先生を車に乗せて鉄橋へ向かった後、私たちは証拠になるクスリやトリカブトの処分を話し合っていたんです、そしたら朝方……」

◎ スーパーヘビー・過去

エレベーター開いて凸川が入って来る

凸川 「…おしまい？」

江田 「!？」

凸川 「もう、おしまい？」

岡本、真っ青な顔で入って来る

岡本 「…車でそのへん走ったら気分良くなったみたい」

凸川 「ごめんねーなんか、汚しちゃって」

静 「ウンでしょお!？」

ノラ 「本当なんです、先生、帰って来たんです」

静 「だって…トリカブトでしょお」

ノラ 「うーん…専門的なことは分かんないけど、

ほら生ガキとか食べても当たる人と当たらない人がいるでしょ？」

静 「毒なの！ 猛毒なのよ！ 確実に殺せるはずなんです」

ノラ 「あれ？ 死んでほしいんですかあ？」

静 「そうじゃなくて…やだ、言わないでしよう、そんなこと、ひと言も」

凸川 「いやあ面倒かけちゃってごめん、

ほんと江田くんには世話になりっぱなしだわあ（照れ笑い）」

江田 「…き、き、気にすんなよ」

ノラ 「その一件からは江田さんも相当おかしくなって、

毎日順子ママとケンカばかりしていました」

◎ スーパーヒーロー・過去

江田と順子がケンカしている

順子 「もおやだ！ 私、知らないからね」

江田 「こっちは危ない橋渡ってんだよ、貰うもん貰って何か悪い！」

静 「なに？ なんの話？」

ノラ 「江田さんが凸やん先生に生命保険を掛けようとしたんです」

順子 「犯罪だよ、分かっているの？ 保険金殺人だよ」

江田 「ただの殺人だって犯罪だろ、安心しろ順子、俺は絶対捕まんねえ自信があんだよ」

順子 「そんなの分かんないじゃない」

江田 「いいから判子よこせつつの！」

順子を押しつけて引き出しを漁る江田
順子、逆上してアイスピックを自分の股間に突き立てる
エレベーター開く、岡本が入って来る

岡本 「げっ！ なにしてんの！」

順子 「言うこと聞かないと…刺すよ！」

江田 「……」

岡本 「お、おまえバカ、そんなことしても気持ちよくねえだろ！」

順子 「オナニーじゃねえよ！ いいの？ もう使い物になんないくらい、

グチャグチャにしちゃうよ、チャンジャみたいにしちゃうよ…チャンジャ？

…チャンシャだよ！ 辛いよ！ いいの!？」

江田 「……」

岡本 「いいってよ」

順子 「ちきしよお」

江田 「ねえよ」

順子 「みろよお！」

江田 「ねえよ判子、おまえ使ったあと戻してねえだろ」

順子 「…知らない」

岡本 「なになに？」

江田 「判子だよ、実印！ ねえんだよ！ どこやったんだよ！」

岡本 「凸やんじゃねえ？」

江田 「あ？」

岡本 「夕べ江田っちが集金に出てる間、凸やんそのへんウロウロしてだけど」

江田 「…本当か」

岡本 「うそ」

江田 「……」

岡本 「ほんと、ほんとほんと！」

江田 「…聞いたか順子、あいつ俺の実印持ち出したぞ」

順子 「……」

江田 「殺していいよねえ、順子ちゃん、殺していいよなあ」

エレベーター開いて凸川がやってくる

凸川 「おしまい？」

江田 「……」

凸川 「いやー参ったよお、寝ようと思ったら保険屋が来ちゃってさあ、

2時だよ夜中の、目え醒めちゃったよお」

順子 「…あんた」

江田 「うどん食ってくるわ」

岡本 「(すかさず) お、おれも」

江田 「ノラ、行くぞ」

順子 「ちよつと待ってよ…ねえ先生は？」

凸川 「うどんは当分いいや」

江田 「…あとは頼んだぞ」

江田と岡本とノラ、出て行く

順子、水割りをテーブルに置く

凸川 「ママも一緒に飲もうよ」

順子 「(遮り) 返して」

凸川 「え？」

順子 「判子、持ってたんでしょ、ここから。

返しなさい」

凸川 「……あ、はい」

と、あっさり実印を順子の手に乗せる

順子 「…マジで？」

凸川 「…大丈夫、悪いことに使ったわけじゃないよ」

順子 「…何してんの、あんた、これ実印だよ」

凸川 「違うよ、小説の印税が江田くんに入るようにして来ただけだよ」

順子 「……」

凸川 「出版社に問い合わせたら書類作り直すのに判子いるって言われてさ、だから借りただけ」

順子 「…あんたバカ…どんだけ鈍感なのよ」

凸川 「いやあ江田くんには世話になってるから」

順子 「江田はあんたを殺そうとしてんだよ！」

凸川 「……」

順子 「もう何ヶ月も前から水割りに農薬とかネズミ殺すクスリ入れてんの」

凸川 「……またまたあ」

凸川、水割りを飲もうとする

順子 「それも入ってんの！」

凸川 「……」

順子 「こないだ食べたでしょ、キムチうどん」

凸川 「うん」

順子 「トリカブト入ってたの、これ、5本も（と見せる）」

凸川 「……」

順子 「…分かったでしょ、江田はあんたを恨んでるの、だから…東京帰ってください、二度とこの店には来ないで下さい、それから今の話、誰にもしちゃダメよ、私、殺されちゃうから（と出て行こうとする）」

凸川 「なんでかな…なんでだろ…」

順子 「あんたが小説書いてるからでしょ、江田が事故つただのハゲただの書くからでしょ」

凸川 「だから書いてないよ」

順子 「自分で言ったばっかじゃん、印税がどうのこうのって」

ノラが入って来る

順子 「…なに？」

ノラ 「江田さんが様子見て来いって」

順子 「…あっそ」

ノラ 「帰っちゃうんですか？」

出て行く順子

ノラ 「あれ？ 飲んでない」

凸川 「…ああ、飲んでないね」

ノラ 「新しいの作ろうか（とカウンターへ）」

凸川 「ねえノラちゃん」

ノラ 「なあに？」

凸川 「順子ママがね、江田くんが僕を殺そうとしてるって言うんだよ」

ノラ 「!？」

静 「…言っちゃうんだ」

ノラ、動揺して殺鼠剤のボトルを倒す

凸川 「どう思う？」

ノラ 「…どう思うって？」

凸川 「君の意見を聞きたいんだよ」

ノラ 「…オーナーがそんな事するわけじゃない」

凸川 「江田くんじゃなくてママだよ、どうかしてるよ本当（水割りを飲む）、生理かなあ、生理かなあ、生理はキツいって言うからなあ、ねえ、キツいでしょ？」

ノラ 「…さあ」

凸川 「いや、生理とはいえ良くないよ、

思うに彼女は江田くんを利用して良からぬ事をたくらんでるね、間違いないよ、江田くんに言っといてよ、別れた方がいいって」

凸川、去る

静 「もー鈍感ていうよりバカじゃん」

ノラ 「そうなんです、もうバカ過ぎて可哀相になっちゃって」

静 「それで？ あなた江田さんに報告したの？」

ノラ 「やめて下さいよお、そんなことしたら。」

今度はママが江田さんに殺されちゃうじゃないですかあ」

そこへ江田が入ってくる

江田 「なんだ、ノラひとりか」

ノラ 「大変ですう、ママ喋っちゃったの」

静 「やっぱ言っちゃうんだ！」

ノラ 「江田さんが殺そうとしてる事、凸やん先生にバラしちゃったんです」

江田 「…あんの野郎お（と探す）」

ノラ 「凸やん先生と2人で出て行きました、たぶん今頃ホテルだと思えます」

静 「…(呆れて)あんなねえ」

ノラ、江田に抱きついて

ノラ 「どうしよう、捕まっちゃうよお、江田さんもノラも捕まっちゃうよお」

江田、必要以上にノラの身体を触りながら

江田 「…大丈夫、大丈夫だ」

◎スーパーへビー・現在

静 「…どういうこと？ あなたママの後輩なんですよ」

ノラ 「関係ないですよ」

静 「関係ない事ないでしょう」

ノラ 「ていうかね、昔からそういうところあるんですよママって、

悪ぶってる割には本当はイイ子みたいな、特に男の前ではそういうキャラ作るの、
ずるいんですよ、ソフト部に長谷川ていう、ちょっとイタイ子がいて、

合宿の時に『長谷川シメるよ！』みたいなこと言うんですよ、

ママが、『シメるよ』とか、そういう台詞、大好きなんですよ、あの人。
ウチら後輩だから言われたとおりやるじゃないですか、
そしたらいきなり『やめなよ!』とか言うの、一番ノッてたくせに
『やめなよ!』って『みんなで長谷川に謝ろ』だって、
要するに『やめなよ!』って言いたくて『シメるよ!』って言う人なんですよ、
もう、こっちはたまったもんじゃないですよ」

静 「…レベルがちがうでしょう…これは警察沙汰なのよ…」
ノラ 「だから早く手を打たないと捕まっちゃうし、
それに私もポイント稼ぎたいっていうのもあって」

静 「あなたも持つてるの? ポイントカード」
ノラ 「はいっ」

静 「…先生は? あんた一応付き合ってたんでしょ?」
ノラ 「江田さんに言われたからですよ、好きでも何でもない」

静 「……」

ノラ 「あ、ごめんなさい、先生と不倫してたんですよ」

静 「それもういいから!」

ノラ 「太陽を盗んだ男、でしたっけ?」

静 「いいから続けて」

ノラ 「次の日、お店終わったあと、江田さんに残るように言われたんです、

そしたら江田さんものすごい顔して…」

座っていた江田、振り返り

江田 「(振り返り) いいかノラ、これはお前と俺だけの秘密だ、俺とお前で…順子を、殺る」

静 「予想通りの展開だわ」

ノラ 「ちょうど6月14日がママの誕生日で、

前の日が定休日だったので江田さんと二人でトリカブト取りにいったんです、

プレゼントは岡本さんに任せて、私はケーキ担当で…」

静 「ケーキに入れたのね、トリカブト」

◎ スーパーヘビー・過去(6月14日)

ケーキを囲んでいる江川、岡本、順子

順子、蝋燭の火を吹き消す

順子 「すごいじゃん、ノラが作ったの？」

ノラ 「そうなんです、私、お菓子作るの趣味なんです、

さあ、ジャンジャン食べて下さいね」

とケーキを切り分けるノラ

岡本 「ここ美味うまそうだなあ、ここ、イチゴでえぞ！ 順子、ほら、ここ！ ここ！

(としつこく指さす)」

順子 「じゃあ食べていいよ」

岡本 「え…(言葉に詰まって江田を見る)」

江田 「順子、幾つになっただ」

順子 「だから24だっって言ってるじゃん、もお」

江田 「そっか…そっかそっか、なんか変な感じだな、こんな小さい時から知ってるし」

岡本 「本当だよ、まさか…こんな事になるとはな」

江田 「(遮り) まあ、色々あったけど、これからもヨロシク頼むわ」

順子 「…ありがとう」

江田 「…愛してるぞ」

順子 「…やだ…(ノラに) 電気、つけたほうが切りやすくない？」

江田 「うん電気つけたほうが切りやすいな」

岡本 「そうだそうだ、電気電気」

と、岡本電気をつける

SE 衝撃音

いつのまにか凸川が立っている

岡本 「凸やん…」

凸川 「おしまい？」

江田 「……」

凸川 「おわ、ケーキじゃん、ウマそお、もーらいつ！」

ノラ 「だめ！」

凸川 「イチゴでかいなあ（と食べる）」

江田 「（慌てて）来い順子」

順子の目を逸そらさせようと手を引っ張る江田

順子 「え？ なになに？」

江田 「プレゼント、プレゼントあるから！」

凸川 「ううううっ！」

口を押さえて倒れる凸川

順子 「え？」

凸川 「うおおおっ！ おおっ！ おおおおっ！ （もがき苦しむ）」
順子 「……あんた」

江田、気持ち悪いぬいぐるみ出して

江田 「ほおら……なんだこれ！」

岡本 「ごめん、ミツキーマウス買いに行く時間なくて、家の毛布で作った」

江田 「……お前は」

岡本 「だって金もったいねえだろ？ どうせ死ぬと思ってたから……」

江田 「ほら順子ちゃん、ミツキー毛布だぞお」

♪ミツキー毛布、ミツキー毛布、ミツキミツキ毛布」

順子、江田を突き飛ばしてノラの前へ

順子 「……どういうこと？ 説明して」

ノラ 「……えと……えつと……ミツキーだあ」

順子 「可愛くねえよ！ あんた、殺す気だったんだ」

ノラ 「……」

順子 「何とか言えよ！」

ノラ 「そんな怒らないで下さいよ、またブスになっちゃいますよ」

順子 「はあ？」

ノラ 「先生のおかげで助かったんだから、お礼言ったらどうですか？」

順子 「……」

ノラ 「あんなのせいで苦しんでんじゃん、あなたが途中で裏切るから、

あんなの中途半端な正義感でこうなってんじゃん、いい加減直しなよ、

その性格、ほんと迷惑」

順子 「……てめえ！」

ノラの髪の毛を掴んで引っ張る順子

江田 「やめろ順子！」

電話が鳴る間

凸川、苦しみながら這って電話に出る

凸川 「はい……スーパーヘビー」

江田 「凸ちゃん！」

岡本、受話器を奪って

岡本 「はいはいお電話変わりました、ええ…え…」

岡本、慌てて電話切る

江田 「誰だよ？」

岡本 「なんか女…週刊太陽とか言ってた」

静 「ストップ」

岡本 「なんすか？」

静 「それ…今の電話…」

江田 「…なんだって？」

順子 「え？」

岡本 「…なんか凸川先生の失踪がどうか」

◎ スーパーヘビー・現在

静 「ちょっと待って」

岡本 「なんだよ！」

静 「(手帳見て) ……やっぱり6月14日…私が最初に電話した日だ」

岡本 「あそお、じゃあそうですね」

静 「なによ、生きてたんじゃん、私か電話した時、先生出たんじゃん」

岡本 「…あの喋っていいスカ？ 次、俺の番なんスけど」

静 「あん時、すぐ助けに来れば間に合ったんじゃん」

岡本 「…えーそのあと凸さんは謎の言葉を残して去って行きました」

凸川、フラフラと立ち上がり

凸川 「…順子ちゃん、どういうつ…もりか知…らないけど、

江田くんをか…悲しませるような事したら…俺…許さないからね」

凸川、苦しみながら去って行く

静 「…まだ気づいてないんだ」

岡本 「そうなんスよねえ、2回死にかけてんのに全く疑ってないどころか、

いつの間にか勝手に深い絆で結ばれてんスよ、江田っちと」

静 「順子ママは？」

岡本 「ああ、さすがにシヨックだったみたいで、

しばらく店にも来なかつたけど、

10日ぐらいしたら何ごともなかつたようにスッキリした顔で働いてました」

◎ スーパーへビー・過去

鼻歌を歌いながら働いている順子

静 「…なんか良いことでもあったのかしら」

岡本 「はい、東京行って渋谷歩いてたらスカウトされたとか言っていました」

岡本・静 「…：あ！」

静 「うちのグラビアだ」

岡本 「そおか…あん時ももう脱いでたんだけ」

ノラ 「ママ、ビール1ケース届きましたあ」

順子 「サンキューでえす！」

岡本 「…女って分かんねえ」

江田 「…おい、聞いてんのか」

岡本 「ああ、聞いている聞いている、いやあ俺は賛成できないなあ」

江田 「最後まで聞けよ、もう毒じゃダメだ、人間てのは意外と強いんだよ、だから…」

順子とノラが出て行くのを確認して

江田 「作戦を変更する」

岡本 「うーん…」

江田 「女じゃダメだ、俺とお前でやる」

岡本 「でもなあ…」

江田 「なんだよ、俺の言うこと聞けねえのかよ」

岡本 「いや…そうじゃないけど、なんつーか俺も同級生としてさ、情がわいてきたつーか、良心が痛むつーか、そんな悪いヤツじゃない気がしてきてさ」

江田 「…へえ」

岡本 「こないだ出版社から電話あったじゃん、失踪してるって、

今やめれば本人まだ気づいてないし、江田っちの事も水に流してくれると思うんだ」

江田 「そおいうのはこれ読んでから言えよ」

『鈍獣』のハードカバーを出す

岡本 「あ、本出たんだ、すっかり忘れてた」

江田 「ひどい事になってるぞ、俺が、つか江本が、

愛人に硫酸かけられて全身に火傷を負ったり、事故に見せかけて車に轢ひかれたり…
要するにあいつ、鉄橋の事故にこだわってたんだよ、あの場にいた俺が…いや江本が、
生かさず殺さずの生き地獄を味わう話を書いてたんだよ毎週」

岡本 「俺は？ 岡田は？」

江田 「…死んだよ」

岡本 「マジで!？」

江田 「…真ん中あたりで死んだよ、しかも唐突に、健康診断で腎臓に悪性の腫瘍が見つかって、
次のページでもう死んでたよ」

岡本 「腹立つわあ、微妙にリアルなのが腹立つわあ、行こうかな健康診断」

江田 「待て、何より腹立つのはあとがきだよ」

岡本 「…(読む) この小説は事実に基づいている、

本文に出て来る江本と岡田のモデルとなった人物は現在も地方都市で暮らしている、
彼らはひとりの少年の命を奪った事を振り返りもしなければ後悔もしていない、
それが人間である、つまり人間とは鈍い獣なのである…ううわ！」

江田 「どうなのよ岡本くん」

岡本 「…もお分かんない、腹減ってきた…なに、売れてんの？ この本」

江田 「これがまた売れてんだよ、そこでこの前の電話だよ、

俺の読みが当たってれば雑誌社の奴ら、俺たちを表舞台に引っ張り出して、吊し上げるつもりだよ」

静 「ぜんぜん当たってないけどね」

岡本 「それ困る！ 本気で困る！ 困る困る困るあー腹減った」

江田 「俺らこのときわ銀座から、いや、社会から抹殺されるぞ、どうすんだよ」

岡本 「……」

江田 「…なんか食うか？」

岡本 「いいよ、自分でやるから」

と厨房へ入る岡本

江田 「事故に見せかけて殺すっつうのは？」

岡本 「いやー、どうかな、今タイヤの跡で割り出せるんだよね」

江田 「じゃあ自殺に見せかけて放火するっつうのは？」

岡本 「あー、放火は検挙率高いんだよ、燃え方で分かるんだよ」

江田 「じゃあ重石つけて海に……」

岡本 「だめだめ、ぜったい無理、海まで何キロあると思ってんだよ（泣く）」

江田 「なんだよ、泣いてんのかよ」

岡本、泣きながら卵を割っている

岡本 「…卵割れない、目玉焼き出来ない」

江田 「岡じー」

岡本 「もーやめよう江田っち、俺みたいな、

目玉焼きひとつ満足に焼けねえ大人に殺人なんか出来るわけねえよ」

江田 「ばか、考えるな、何とかなるって」

岡本 「絶対捕まる、絶対捕まるよお！」

江田 「落ち着け！ 現にひとり殺したじゃねえかよ」

岡本 「…あれは事故でしょ、事故だっつったじゃん」

江田 「殺したんだよ、お前は凸やんを殺したんだよ」

岡本 「お、俺え？」

電車が通る音

江田 「お前だよ、お前が時計に電池さえ入れてれば…凸やんは死なずに済んだんだよ、

お前があいつを殺したんだよ」

岡本 「江田っち」

江田 「やれば出来るって」

岡本 「…出来るかなあ」

江田 「出来る、お前なら殺せる、目玉焼きも作れる、お前はお前が思ってるよりいーっぱい、いーっぱい賢い子なんだから」

◎ スーパーへビー・現在

岡本 「とまあ、巧みにそそのかされて」

静 「ぜんぜん巧みじゃないんですけど」

岡本 「とにかく断れなかったんすよ、今までも江田っちに頼まれて断った事ないし」

静 「…確かに、私もこのあとがきはどうかと思ってたの、

貴方がただって幾ら何でも忘れたわけじゃないですよ、事故のこと」

岡本 「忘れるわけじゃないじゃあ、凸やんが来るまで、

俺と江田っちの間であの事件は最大のタブーって言うか、

とにかく触れたくない過去だったんすよ、

だから『俺は人ひとり殺してんだ』とか言うの聞くたびに俺、

あー江田っちもまだ引きずってんだあって、俺まで哀しくなるっつーか」

「……」

岡本 「別にあんたの事、責めてるわけじゃねっすよ、

面白い小説書かすのがあんた方の仕事だもんなそれに、

静 内容がどうかじゃなくて江田っちにしてみりや面白くないわけですよ
「なにが？」

岡本 「差あつけられたっていうの？ 自分はこんな田舎でくすぶってるのに

凸やんは作家先生でしょ、ハッキリは言わないけど…やりきれないスよ…
まあ、どんな理由があっても罪は罪だけだね」

静 「どうして、時々まともなこと言うの？」

岡本 「(遮り)それから2、3日、俺は凸やんの後をつけてチャンス伺いました、
そしてついに(立ち上がり)…やった！ やったよ江田っち！」

◎ スーパーヘビー・過去

息を切らせて江田に抱きつく岡本

順子 「ど、どうしたの？」

岡本 「轢いた…車で轢いた…凸やん轢いた」

岡本、取り乱して酒を瓶ごとあおりながら

江田 「ほんとか！」

岡本 「おお、やったよ、やってやったよ！ マンションの前で待ってて、出て来たところをバーン！ ふっとばされてブロックに頭ぶつけたところをバックでバーン！ だよ、最後に右足を後輪でミシミシーっ踏んでやった」

江田 「誰にも見られてねえだろうな」

岡本 「見られてねえ、見られてねえよ、だって俺も見えてねえもん」

江田 「え？」

岡本 「え？」

江田 「……どういう事だよ」

岡本 「……ああ、やったの明、明がやった、明の車で」

江田 「お前は？」

岡本 「うん、救急車呼びに行ってた、アリバイだよ、アリバイエ作」

江田 「それ……アリバイか？」

岡本 「救急隊員の話じゃ、おそらく即死じゃねえかって」

江田 「……そおか、まあ、まあ、良くやった！」

岡本 「……おお」

江田 「明は？」

岡本 「明？ ああ、車捨ててに行った」

江田 「……大丈夫か？」

岡本 「大丈夫、今日中にスクラップになるから絶対足つかないよ」

順子 「あんた、あんた…」

江田 「……」

岡本 「とりあえず乾杯、ドンペリで乾杯しようぜ」

江田 「ノラ、ドンペリ」

岡本 「よかったな江田っち、これで凸やんから解放されるぞ…」

S E 衝撃音

入り口に包帯だらけの凸川が松葉杖ついて立っている

凸川 「おしまい？」

江田・岡本 「……」

凸川 「もうおしまい？」

順子 「…ど、どうしたの、それ」

凸川 「いやー参った、マンション出た所で車に轢かれて意識不明だよお、

なんか親切な人がいて、救急車呼んでくれたって…一杯ちょうだい」

江田 「の、飲まない方がいいだろ」

凸川 「飲まなきゃやってらんねえよ、痛くてさあ、明日、警察の事情徴収あるから、

それまでに病院戻るわ」

◎ スーパーヒーロー・現在

岡本 「…結局その事情徴収で、凸やんが俺のアリバイを証明してくれて」

静 「成立したんだ、アリバイ」

岡本 「バリバリした」

静 「だっておかしいじゃない、あなた先生轢かれる前に救急車呼んでるわけでしょ」

岡本 「早期発見早期治療で一命をとりとめたって新聞にも載ったっつもの！」

静 「早過ぎるでしょうに」

岡本 「…で、次は凸やんの退院を待つて実行しました、ここで快気祝いやって、そのまま送って行くフリして(立ち上がり)」

◎ スーパーヒーロー・過去

岡本 「やった！ 今度こそやった！」

岡本、江田のほうへ

江田 「本当に俺が言ったとおりやったんだろな」

岡本 「やったよ、今度は俺がやったっつもの！」

江田 「そうかそうか、頑張ったぞ岡じー」

岡本 「まず車から降りしてさ、山人中、すかさず凸やんの背後に回り込んで

バールでガン！一撃だよ、それで倒れたところ、痛い方の足をもう一発ガン！

その後ドーンとひっくり返して正面からガンガン！

完全に気を失ったところでスコップ出してガンガンガン！

いやあ我ながら恐ろしいヤツだわ明の野郎」

江田 「明？」

岡本 「うん、今回も明、俺、穴掘ってた」

順子 「穴？」

岡本 「凸やん埋める穴に決まってるんだろバカ！」

江田 「：誰にも見られてねえだろうな」

岡本 「うん、穴掘ってる場所は見られたけど」

江田 「誰に」

岡本 「警官、巡回中の」

江田 「お前、バカ、知らねえぞ」

岡本 「大丈夫だよ知ってる奴だから『ご苦労様です』って言われただけだよ、

そりゃそうだよ5メートル掘ったからね」

順子 「掘り過ぎだよ」

岡本 「そこでその穴に凸やん埋めて、明と二人で土被せて来たから、

あれで脱出できたらモグラかプリンセスエンコーだね」
「きゃあ！」

SE 衝撃音

入り口に泥まみれの凸川がスコップで身体を支えて立っている

凸川 「おしまい？」

江田 「…岡じー」

凸川 「いやあ、参ったよ、寝ぼけて落とし穴に落ちたみたい、
目が覚めたら土ん中だもん…一杯ちょうだい」

◎ スーパーへビー・現在

岡本 「(静に) いやあ、人間の生命力ってすごいすね」

静 「…ていうか、何やってんのよ警察は」

岡本 「ちよつと喋りすぎた、江田っち交代」

江田 「…なんだ、まだいたのかあんた」

静 「いますよ、もう4時過ぎだし始発で帰ります」

岡本 「今日のこと、この人に話してあげて」

静 「今日!？」

岡本 「あ、もう昨日か」

静 「ちょっと待ってよ、昨日まで先生、生きてたの？」

江田 「生きてましたよ、でもその前に話さなきゃいけない事ありますね」

岡本 「やめろよ江田っち」

江田、静の前に座って

江田 「あなたの探してる凸やんと、こいつが殺した凸やんは…別人なんだよ」

静 「別人で…どおいうこと？」

岡本 「聞かなくていいッスよ、疲れてんだよな、江田っち」

江田 「疲れてんのか俺」

静 「(岡本に) なんなの？」

岡本 「先週の金曜日、江田っちが突然この店を畳むって言い出したんです。

まあ当然といえば当然なんですが、

凸やんが来れないように、

その前からどんどん早く閉めてましたから」

◎ スーパーヘビー・過去（数時間前）

順子が電話している

江田、呆然と座っている

順子

「申し訳ございません、先週で閉店したんですよ…ええ、

下のスナック『順子』は通常どおり営業しておりますので…はい、お待ちしています」

江田

「…ノラ、お前も帰っていいぞ」

ノラ

「でも…」

江田

「帰れよ、つうかどつか遠くへ逃げろ、メキシコとか…ニューメキシコとか」

ノラ

「オーナー…」

江川、電話を掛ける

江田

「もしもし、ときわ警察署の方ですか」

順子

「え？」

江田

「スーパーヘビーの江田と申しますが、聞いてほしい話があるんです、

ええ、凸川隆二という作家の事で…今すぐこっち来てもらえますか？」

順子、受話器を奪って電話を切る

江田 「なにすんだよ…」

順子 「バカなことやめてよ、あんたがいなくなったら私、どうやって生きていけばいいのよ」

江田 「大丈夫、お前も捕まるから」

順子 「……」

江田 「文通しよう、弁護士を通じて文通しよう、あ、それから今日、

例の週刊太陽の記者が来るから、その人に喋る、全部」

順子 「…やだ、あたし絶対やだ、まだ24だよ、この先まだまだ…」

江田 「いいことなんかねえぞ」

順子 「……」

江田 「俺みてえな男と付き合ってたら何もいいことねえ、俺が言うんだから間違いない、

もし自分が幸せだっと思うとしたら、それは自分より不幸な人間を見た時だけだよ、

自分より不幸な人間はどこにいる？ 刑務所だよ、な、そうだろう？ 刑務所行こうよ、

デイズニールランドだと思って、幸せ探しに行こうぜ、

ミッキーやドナルドが番号で呼ばれてんだよ、決まった時間にパレードしてんだよ、

こんな幸せないって（ノラに）お前は連れていけない、

メキシコ人は連れてかない、テキーラ！」

ノラ 「…少し寝てくださいよ、疲れてるんですよ、ねえママ」

江田 「疲れてる？ じゃあ疲れてない時の俺は正しいのか？ いやいや、正しくねえぞ、ずいぶん正しくなかったぞ、なあ順子」

順子 「……あんた」

エレベーター開き警官の制服を着た岡本が現れる

岡本 「ごめんくださいーい、ときわ警察署の者ですがー」

静 「はあ？」

岡本 「なんスか？」

静 「それ、ラサール石井のコスプレ？」

岡本 「警官だよ！ 失礼だろ！ ラサールに！」

静 「あなた…お巡りさんだったの？」

岡本 「おう、一応、巡查副部長（とバッチを見せる）」

静 「信じらんない、信じらんない、なんで早く言わないの？」

岡本 「聞かれなかったからだよ」

静 「聞かれなくても言いなさいよ！ 自分で！ なんで黙ってたのよ！」

岡本 「黙ってねえよ！ ベラベラベラ喋っただろうが！」

静 「そうじゃなくて…」

岡本 「じゃあ言わせてもらうけど、

俺、一回でも『お巡りさんじゃありません』って言ったかよ！ 言ってねえだろ！

お巡りさんじゃねえって言わない限り、人はお巡りさんかもしんねえんだよ、

以後気をつけろ！」

静 「…警官のくせに、副部長のくせにオッパイ触ったの？」

岡本 「だから…あつたから触つたつってんだろ！」

警官とか副部長とか関係ねんだよ職業とか階級とか関係ねんだよ！ 殺すぞ！」

静 「あ！ だから今まで都合よく表沙汰にならなかつたんだ、

あなたが全部もみ消してたのね」

岡本 「もみ消してません…もみ消しました」

江田 「岡じー俺、自首するわ」

岡本 「江田っち…」

静 「ちよつと、まだ話終わってない…」

江田 「逃げないように手錠ハメてくれ」

岡本 「…まあ座れよ、江田っち疲れてんだよ」

江田 「だから疲れてるって言うなあ！ もし疲れたら言うから自分で！ それまで言うなあ！」

岡本 「相当、疲れてるな」

江田 「江田っち、分かちつたんだよ」

岡本 「なにが」

江田 「凸やんが死なない理由」

岡本 「……」

江田 「あいつ…凸やんじゃねんだよ」

音楽

岡本 「……江田っち、そういう芝居は捕まって精神鑑定の時にした方が」

江田 「まだ分かんねえのかよ」

岡本 「分かんねえよ！ 凸やんじゃなきや誰なんだよ」

江田 「…凸やんだよ」

岡本 「……」

別の場所（舞台上方に）に満身創痍の凸川が浮かび上がる

凸川 「うん、俺、頭、悪い」

岡本 「…ううあ！」

江田 「ううあ！」

岡本 「おいおいマジかよお」

順子 「なんなのよ、もお」

江田 「小学校ん時の凸やん、小説に出てくる電車に突っ込んだ方の凸やんだよ」

また違う場所に凸川浮かび上がり

凸川 「うん、俺、足、速い」

順子 「…ううあ！」

ノラ 「…ううあ！」

江田 「死んでねえんだよ、あいつ生きてたんだよ」

岡本 「…いやいや、それはねえだろお、だって、ええ!？」

あいつ、走ってくる電車に突っ込んだんだぜ？ 正面から」

江田 「だけど死体見つかってねえだろ」

ノラ 「そ、そうなんですか？」

岡本 「1年以上かけて探したのに見つかんかったんだよ…いやーでもさあ…

いくら何でも顔で分かるよ、だって凸やんと凸やんだろ…凸やんと…凸やん…」

順子 「なによ、どうしたのよ」

岡本 「…分かんねえ」

江田 「そうなんだよ、俺も分かんなくなっちゃったんだよ、何せ25年も前だからさ」

岡本 「江田っちか同じあだ名つけるからだよ！」

江田 「もし電車に轢かれても死なない凸やんだったら…」

岡本 「車に轢かれても死なないわ」

ノラ 「どおりで…小説なんか書いてないって言うわけね」

江田 「うん、だって書いてねんだもん」

岡本 「じゃあ誰だよ、小説、誰書いてんだよ」

江田 「もう一人の凸やんだよ」

岡本 「ううあ、俺ら、なんの罪もねえ凸やん殺そうとしてたって事？」

順子 「ちよっと待って、今日みんなバカになってるから、いつもよりバカになってるから、各自、持ち帰って冷静に考えようよ」

エレベーター開き凸川が現れる

凸川 「…おしまい？」

SE 衝撃音
身構える一同

凸川 「…もう、おしまい」

一同、江田を見る

江田 「お、お、おしまいだよ、金輪際、この店はおしまいだよ」

凸川 「なんで？」

江田 「なんでって…潰れたんだよ」

凸川 「うそお、じゃあ俺、明日からどこに行けばいいんだよ」

江田 「知らねえよ」

凸川 「冷たいこと言わないでよ、江田くん、友達でしょ」

江田 「と、友達じゃねえよ、つうか、お前、誰だよ」

凸川 「凸やん」

江田 「分かっているよそれは、どっちの凸やんだって聞いてんの！」

凸川 「どっちの？」

江田 「小学校の時の凸やんか、中学の凸やんか、
ちよつと何でさっきから俺ばっか喋ってんだよ！」

岡本 「お、おまえ、いつ俺と同級生だった？」

凸川 「…（考えて）覚えてないわ」

岡本 「んなわけねえだろ、
友達だったら一緒に遊んだのが小学校か中学校かぐらい覚えてんだろ普通」

凸川 「岡本くんは？」

岡本 「…覚えてねえから聞いてんだよ！」

凸川 「じゃあ俺も覚えてないわ」

岡本 「……（順子に）交代」

順子 「私い!？」

凸川 「もお、なんでもいいから一杯飲ませてよ」

と、カウンターにあるボトルに手をかける

順子 「ダメ! その前に聞かせて…小説書いてるでしょ？」

凸川 「またそれえ？」

順子 「答えたら飲んでいいよ」

凸川 「…書いてないって、書けるわけないじゃん」

順子 「……うそ」

凸川 「答えたよ、早く飲もうよ」

順子 「なんでうそつくの! そんな事して何の得があんのよ!」

凸川 「(困り果て) …ノラちゃあん」

ノラ 「来ないで! (逃げる)」

凸川 「…なんで逃げるんだよお」

ノラ 「気持ち悪いから、なんか、気持ち悪いの」

凸川 「あっ」

凸川、よろけて窓から落ちそうになるが、岡本に捕まって何とか

持ちこたえる

岡本 「…危つぶねえ(笑)」

江田、凸川と岡本を窓から突き落とす

岡本 「うーあっ！」

ドスンという落下音

電話が鳴る

江田 「俺が出る…いいか、お前ら、凸やんから目え離すな」

江田、電話に出て

江田 「…はいスーパーヘビー、はい、え、静岡？」

静 「あ、私！」

江田 「あーはいはい、太陽出版さんね、えーえー、そうですか、ごゆっくり、キヨスクのチャージングな3人のおばさんに聞いて下さい」

入り口から岡本が拳銃を手に入ってくる

岡本 「なにすんだよ！」

江田 「(手で岡本を制して) 静岡さんね、ああ、静さんですか、どっちでもいいや、はい、はいはい、よろしくどーぞー(切って) やっべえ！」

岡本 「…誰？」

江田 「出版社の女、いま駅だって、歩いて来るって」

順子 「来るの!？」

岡本、目につく荷物を片っ端からエレベーターの前へ運ぶ

ノラ 「なにしてんの？」

岡本 「見りゃ分かんذار、入って来れねえようにしてんだよ」

順子 「だれが」

岡本 「凸やんだよ！ あいつ、空中で身体ひねって俺の上に落っこちて来た」

その時、凸川が窓から這い上がって来る

凸川 「なにすんだよお」

S E 衝撃音

順子 「うああっ」

凸川 「痛ったいなあもう、冗談きついよお、
一杯ちようだい」

江田 「…なんだよ…なんなんだよお…」

凸川 「飲まなきゃやってらんないよ」

江田 「順子！」

凸川、カウンターに向かう

順子、コップに水を注いで

順子 「はい、凸やん、はいはい」

凸川、水を受け取って飲む

凸川 「…ふう、死ぬかと思ったよ」

と、そのまま崩れるように倒れ込み動かなくなる

岡本 「…なに…なに飲ませた？」

順子 「水」

ノラ 「ただの水？」

順子 「ただの水」

岡本 「…水が弱点だったのか」

江田 「バカ、疲れて寝ただけだろ」

江田、奥から段ボール箱を出して来る

江田 「こん中に詰めろ」

順子 「え？」

凸川に手錠をはめる江田

江田 「寝てる間に運ぶんだよ、岡じー手錠！ (携帯で時間見て) 始発何時だったけ」

岡本 「上りが5時10分」

江田 「(電話かけながら) ごめんな凸さん、俺も岡じーもこんな感じだけど

まだ普通の暮らしに憧れてんだ、久し振りに会いに来てくれたのは嬉しいけど、
ずっといられると迷惑っつーか、いろいろ思い出したりするし、

(電話に) あーもしもし、明、今すぐ車で来て、運んでほしいもんあるから…あ？
知るかバカ！ 別れろそんな女！ (切って) 何ボサっとしてんだよ早く詰めるよ！」

順子 「…やだ」

江田 「(舌打ち)」

江田と岡本、凸川を持ち上げて箱に入れると、その箱を台車に乗せて

江田 「俺、車回してくるから、岡じー着替えて10分後に下に集合」

岡本、自分が制服を着ている事に気づいて

岡本 「あ、ああ」

江田 「ガムテでキッチリ貼っつけ、それくらい出来るだろ」

江田と岡本、出て行く間に

ノラ、カウンターの奥へ

順子 「……やんの？」

ノラ、ガムテープを手に戻ってくる

順子 「やるんだ」

ノラ、黙ってガムテープを貼る

順子、テーブルに座って

順子 「…あんたさ…本当にソフト部？」

ノラ 「……」

順子 「悪いけど、覚えてないんだよね、

私、あんたのこと」

ノラ 「…私は覚えてますよ」

順子 「…あそお」

ノラ 「ママ、ドブに落ちましたよね」

順子 「……はあ？」

ノラ 「……」

順子 「落ちてないよ」

ノラ 「……」

順子 「…貸して」

順子、ガムテープを奪って、箱に貼る

ノラ 「…ママ、ドブに落ちましたよね」

順子 「落ちてねーよ！」

ノラ 「…すいません」

順子 「もう一回、言ったら分かってる？ ぶん殴るからね」

ノラ 「……」

順子 「……」

ノラ 「…先輩、ドブに…」

順子 「落ちてねえよ！」

と、掴みかかり格闘に

エレベーターが開く

静が現れる

静 「…何してるのっ！」

慌てて中に入ろうとするが、エレベーターの前に台車に乗った箱

が置いてあつて中に入れない

順子

「誰!？」

静

「週刊太陽、いえ、元週刊太陽の静です…やめなさい！」

順子がビール瓶を掴んで振り上げる

荷物を乗り越えて順子の手を押さえる静

静

「およしなさい」

順子

「外野はすっこんでろ！」

静

「…外野はともかく、すっこんでろとは何ごとよ…わああー」

順子に押されて台車ごとエレベーターに押し込まれる静

肩で息をする順子とノラ

エレベーターが開いて静が出て来る

静

「ちょっと待って下さい、何？ これじゃ、まるで私が下まで運んだみたいじゃない」

順子

「実際そうだから」

静

「…違う、違うでしょ、あなたが押したから…ていうか、あの箱、どこに運んだのよ」

順子 「さあ、知らない」

静 「ええ？ 先生は？」

ノラ 「先生じゃないですよ、あれ、ただの凸やん」

静 「じゃあ先生は…」

ノラ 「知りませんよ、

どっかで小説書いてんじゃないですか？」

◎ 鉄橋の上・過去（数時間前）

風が吹いている

岡本と江田が段ボール箱を持って歩いている
線路の真ん中に段ボールを置く

岡本 「江田っち」

江田 「…なんだよ」

岡本 「俺、ここ来たの、あれ以来かもしんねえ」

江田 「…俺も、25年ぶり」

岡本 「江田っち、これからどおすんの？」

江田 「ああ（時計見て）まだ集金とか残ってるから、回転寿司とか回って」

岡本 「じゃあ先に行っていいよ」

江田 「…岡じー」

岡本 「俺もすぐ行く、たぶん店で待ってるわ」

江田 「…じゃあな」

江田、去って行く

岡本、背後を気にしながら、しゃがんでガムテープを剥がす

中から現れる凸川

凸川 「岡本くん」

岡本 「シッ！ ……よお、凸やん」

凸川 「…ここ、どこ？」

岡本 「知ってるくせに」

凸川 「(周囲を見渡し) 鉄橋だ…」

岡本 「そお、鉄橋だ」

凸川 「江田くんは？」

岡本 「先、帰した…俺、凸やんと2人きりで喋った事ねえからさ」

凸川 「…そお言ええば、そおだね」

岡本 「なんかごめんな」

凸川 「なにが？」

岡本 「江田っちといるとさあ、なんか凸やんの事ついバカにしちゃうっていうか、
そういう空気になっちゃうけど、本当は俺、
凸やんとすげえ合うんじゃないかと思ってたんだよ」

凸川 「(身を乗り出す)」

岡本 「ダメだよ顔出しちゃ、江田っちに見つかる俺まで怒られるって」

凸川 「…ごめん」

岡本 「俺、一個だけ凸やんの秘密、知ってんだぜ」
凸川 「え……ええ？」
岡本 「凸やんさあ、耳の後ろに鉛筆の芯刺さってんだろ」
凸川 「……」
岡本 「授業中、居眠りしてブスって刺しちゃったんだよな、自分で」
凸川 「……覚えてないわ」
岡本 「見してよ（と手を伸ばす）」
凸川 「……」
岡本 「……やっぱりあるよ、ははは、凸やんだよ！」
凸川 「……あははは、あははははははは」
岡本 「ねえよ」
凸川 「……」
岡本 「（背後を気にして）逃がしてやろうか」
凸川 「え？」
岡本 「その代わり、俺には本当のこと教えてくれよ」
凸川 「……」
岡本 「小説、書いただろ」
凸川 「……書いた」
岡本 「……」

岡本、凸川の足を拳銃で撃つ
しばらくして

凸川 「…痛いなあ」

岡本 「鈍いなあ、痛い時はもつと痛そうにしなきゃ」

と、もう一方の足も拳銃で撃つ

岡本 「じゃあな、逃げていいぞ」

岡本、去る

凸川、逃げようとするが身動きできない

凸川 「…岡本く〜ん、岡本く〜ん」

◎ スーパーヘビー・現在

呆然と座っている5人

静 「：始発、何時でしたっけ」

順子 「5時10分」

静 「(時計を見る)!!」

ノラ 「お帰りになります?」

静 「いや：もう間に合わないから：」

静、出て行こうとエレベーターの方へ

引き止める順子

振りほどいて出て行こうとする静

腕をつかんで引き止める岡本

電車が近づく音

だんだん大きくなり、店内の会話をかき消す

電車がブレーキを掛ける。

思わず耳を塞ぐ静

舞台上、線路の上を列車が走って来る

段ボール箱を踏みつぶしてようやく停止する

江田 「…静さん」

静 「……」

江田 「…静さん」

静 「え？」

江田 「…テープ、終わっちゃってるよ」

静 「…そうですか」

江田 「…ごめんな、話があっちゃこっちゃ行ってる間に先生、死んじゃった」

静 「……」

江田 「でも、こうするしかなかったっつーのも分かってくれるよな」

静 「…先生は生きてます」

江田 「…あんた」

静 「あんたたちが殺したのは先生じゃない、絶対違う」

岡本 「…いや、だって小説書いたって言ったし」

静 「だから何よ！ あんたたちみたいなマヌケに殺されるほど、先生マヌケじゃないもん」

江田 「……」

静 「なによ、なんで黙るの？ 言い返せばいいじゃない」

江田 「いや…あんたの言う通りだから」

静 「え？」

江田 「本当だよ、もっと楽に死ぬる方法、いくらでもあったはずだよな」

静 「いや、そういう問題じゃなくて」

岡本 「俺らしか話し相手いなかったんだもん、可哀相なヤツだよな」

ノラ 「ていうか…いい人でしたよね」

静 「…な…何言ってるの今さら！　さんざん痛い目に遭わせたくせに」

順子 「あんたが、あんな小説書かせるからいけないんじゃないんじゃん」

静 「…関係ない、だからって殺していいって事にはならないでしょ」

江田 「…そうだよ、何も殺すことなかったよな」

岡本 「ごめんな静さん」

静 「…なんなの？　なに急にいい人になってんの！　先生は死んでない、

絶対、絶対、探し出してみせます」

江田 「手伝おうか」

静 「結構です！」

江田 「じゃあ駅まで送ってくよ」

静 「結構です…!!」

エレベーターが開く

と凸川が立っている

片手、片足を失い、顔も変形している
静、驚いて飛び退く
息を飲む一同

凸川 「…おしまい？」

一同 「……」

凸川 「…おしまい…だよね」

一同 「……（江田を見る）」

江田 「……お、おしまいじゃねえよ」

凸川、優しく笑って倒れ込む

岡本 「…凸やん」

凸川 「いやー…参った、線路で寝ちゃってさあ」

江田 「な、なんか飲むか」

凸川 「…ああ、凸やんなんか飲むわ」

岡本 「凸やんだよ」

凸川 「…飲まなきゃやってらんないよ」

ノラ 「凸やん」

凸川 「…やあノラちゃん」

順子 「凸ちゃん先生！」

凸川 「…順子ママ…江田くん…岡本くん…はは」
一同 「(笑う)」

凸川、静に気づく

江田 「…どうなんだよ」

静 「……」

江田 「…あなたの知ってる凸ちゃんなのか？」

静 「……わかんない」

江田 「わかんない？」

静 「メガネないから…メガネないから分かんない…メガネないから」

江田 「しっかりしろよ！ あんたしか見分けつかないんだぞ！」

岡本 「そおだよ、どっちなんだよ」

静 「……」

凸川 「…やあ」

静 「……誰だか分かるんですか？」

凸川、マジマジと見て

凸川 「……ごめん、覚えてないわ」

静 「……」

E
N
D